転生した俺はISの世界で折原臨也になった！

餓鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生した俺はISの世界で折原臨也になった！

【Nコード】
N6851W

【作者名】
餓鬼

【あらすじ】
ある日死んだ俺は神に転生させられ気づいたらISの世界に居た。
もし、誤字などがありましたら指摘してください。

転生だと！（前書き）

この小説は作者の思いつきで書いたものなので悪しからず。

転生だと！

皆さんはあるだろうか？　死んで目が覚めたら阿部さん似の人が目の前に居る恐怖を

「俺、ホモじゃないから許して」

俺は土下座をしたぜ、それもジャンプして。

「いや、俺、ホモじゃないから」

なんだと！　こんなに似ているのに、青いつなぎを着ているのにホモじゃないだと！？

「さっきから、すべて聞こえてるのだが」

「読心術だと」

この阿部さんやりよる。

「すまない」

いきなり、イケメンボイスで謝りだしたぞ？　この阿部さん。

「いきなり、なんですか？」

「すまない、俺の名は阿部だ！」

やっぱり、阿部さんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

「俺は創造神だ」

「中二病乙」

「俺は、お前の命を無くしてしまった」

スルーだと……命を無くした、俺ってこいつに殺されたの？

「そこで、お前に新たな人生を生きてもらう」

「ありきたりな設定だな」

「お前には、ＩＳの世界で折原臨也になってもらう」

「おい、なぜここで『デュラララ！！』のキャラが出てくる」

「俺が好きな小説のキャラだから？」

コイツの頭は大丈夫か？

「そうと決まったら、さっそく転生だ」

いきなりすぎないか？

「行きたくなければ、や・ら・な・い・か？」
「是非、行かせてもらいます」
コイツ、本物の阿部さんだろ！　絶対！
「なら、いってこい」
あれ、足元が無くなったような……って、無くなってるし！
「次、会ったらころすぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！」
そして、俺はＩＳの世界に転生してしまった。本当に折原臨也の姿で、それ以前に小学生まで戻ったぞ、なんで俺がこんなことをでも、俺って臨也のキャラって好きなんだよな。

キャラ設定

名前：折原（おりはら）　臨也（いざや）

旧名：東條（とうじょう）　秀樹（ひでき）

見た目：『デュラララ！！』の臨也そっくりに転生したため性格までもが臨也そっくりになってしまった残念な元高校生。

人間関係：織斑姉弟と篠ノ之姉妹とは幼なじみ、一夏と箒とは同い年、千冬は静雄的な立ち位置に着いただって、ちーちゃんって呼ぶのが面白かったからｗｗｗｗ、束とはとても仲がいい似た者同士だから？

年齢：永遠の１８歳（１５歳）

今の所ヒロインは千冬さん、束さん、楯無さんの三人ですかね。主人公は転生してもしなくても鈍感です。こんな感じですがＩＳの設定は専用機が出てきてから書こうか書かないか迷っていますが、名前だけ発表します『デュラハン』です。この名前は神が付けたことになります。設定もチートです。
ヒロインの追加をします、ギロさんの案で山田先生を追加します。

計画どおり！

転生してから１０年がたった。今は立派な高校受験の日、俺はいつものように椅子に座ってパソコンを弄っていたら携帯に着信がきた。

「どうしたんだい、一夏くん」

この喋り方は面白いな。

『イザヤ、すまないけど道を教えてくれないか？』

気づいたかい、皆俺の事を臨也ではなくイザヤと呼ぶんだ、何でだろうね？

「次、見た扉を開けるといいよ」

『ありがとな』

思ったけど、一夏くんは人を疑うことをしようね。

「おっと、チャットを止めてしまった」

甘楽『みなさん知っていますか？』

ウサギ『なになに？』

鬼『詰まらんかったら、叩くぞ』

甘楽『いやん、鬼さん怖い』

ウサギ『怖いよ』

鬼『早くしろ（怒）』

甘楽『実は、男がＩＳに乗れるっていう都市伝説』

鬼『よし、しばきに行くか』

――鬼さんが退室されました――

秘密モード

ウサギ『いっくんのこと？』

甘楽『教えません』

ウサギ『毎日が楽しくなりそうだねイザくん』

甘楽『やっぱり、日常より非日常の方が快感だね』

ウサギ『M発言かな？』

―――甘楽さんが退室されました―――
ウサギ『落ちちゃった、なら私も』
―――ウサギさんが退室されました―――
―――現在、チャットルームには誰もいません―――
―――現在、チャットルームには誰もいません―――
―――現在、チャットルームには誰もいません―――
―――現在、チャットルームには誰もいません―――
―――現在、チャットルームには誰もいません―――
―――現在、チャットルームには誰もいません―――
―――現在、チャットルームには誰もいません―――
―――現在、チャットルームには誰もいません―――
―――現在、チャットルームには誰もいません―――
―――現在、チャットルームには誰もいません―――
―――現在、チャットルームには誰もいません―――
―――現在、チャットルームには誰もいません―――
―――現在、チャットルームには誰もいません―――

「ここだな」
俺はイザヤに言われた通りに扉を開けるとそこにはＩＳが置いてあった。
「何でここにＩＳがあるんだ」
俺は興味本位でＩＳに触れると、ＩＳが光りだした。
「何だよこれ」
「何をしてるんですか」
後ろから女の人たちが入ってきた。
「ＩＳが起動している」
今、何て言いましたか？
「男がＩＳを起動させるなんて」
イザヤぁぁぁぁぁぁぁぁ、お前、嘘言ったな！

新学期の準備（前書き）

チャットルームでの話し方を変えます。

甘楽は《》

鬼『』

ウサギ「」

で行かせてもらいます。

新学期の準備

「おや、もうニュースやってるじゃないか」
　そのニュースは一夏くんがＩＳに乗ることができるニュースだった。
「俺はこれからはどうやって原作に介入しようかな」
『私に用かい』
　突然目の前に阿部さんの幽霊が目の前に現れた。
「やあ、どうしたんだい？」
『反応が鈍いな』
　何を言ってるんだろうな。
「用が無いのなら、お引き取り願おうかな」
『君にコレを渡しに来たんだよ』
　渡されたのは小さなナイフだった。
「これはＩＳの待機状態かい？」
『驚かないのかい？』
　転生したのだからコレぐらいは予想はつくだろう。
「只の勘だよ」
『なら、これは渡して置くよ。ついでにＩＳ学園に編入届け出しておいたから』
「あなたはいつも勝手ですね」
　でも、これで原作介入がしやすくなったな。
『それでは私はこれで失礼します、アニメが見たいので』
　頭の中は子供なんだね。
「それじゃ、俺は原作を楽しむよ」
　阿部さんは闇の中に消えていった。
「いよいよだね」
　俺は部屋の窓から外の景色を見ながら叫んだ。
「楽しみだなあ。楽しみだなあ。楽しみだなあ。この街は俺でも知

らない事がまだまだ溢れ、生まれ、消えていく。これだから人間が集まる街は離れられない！　人、ラブ！　俺は人間が好きだ！　愛してる！　だからこそ、人間の方も俺を愛するべきだよねえ」

　このセリフは一度でも良いから言ってみたかったんだよねえ。

　チャットルーム（深夜）

　――苦労人さんが入室されました――

｛こんばんわー｝

《こんばんわ》

『ばんわー』

［やぁー］

《苦労人さん、今日の昼間はどちらに行かれていたんですか？》

｛高校受験に行ってました｝

『［落ちたらいいのに］』

｛酷くないですか！｝

《皆さん、酷いですよ。一応、応援しましょうよ》

｛甘楽さんも苛めるんですか！｝

《『［面白いから（ですよ）］』》

｛ここには、俺の敵しかいないのか｝

［今更だねぇー］

《そこは、隠しておかないといけませんよ》

｛あんたらは、悪魔かぁ！　それよりこれから、あまり来れないと思います｝

《彼女が出来たんですか？》

『早く吐け！』

｛違いますよ、高校からタウン〇ージぐらいの厚さの資料を渡されたんで読まないといけないんで｝

《それで、思い出しました。今日なんと男のＩＳ操縦者が現れたそ

うですよ》

――苦労人さんが退出されました――

『拗ねて帰ったな』

［暇だぁ―］

《なら、私たちも落ちましょうか》

――甘楽さんが退出されました――

――鬼さんが退出されました――

――ウサギさんが退出されました――

入学？

いやぁ、この日が来るとは思わなかったよ。門の前で待機してお
けと言われ待っていたら、迎えに来た教師がちーちゃんだとはね。
「久しぶりだね、ちーちゃん」
臨也の顔では滅多に見ることが無いスマイルであいさつをしてみ
ました。
「いーざーやーここでは、織斑先生だ！　それに、制服はどうした
！」
俺の格好はいつものフード付の黒いコートを着ているよ。
「いやーあれね、来るときにステーキのたれがこぼれてね」
「まぁ、今日は許そう」
ちーちゃんの顔は少し赤くなっていた、熱でもあるのか？　結構時間立
ってるけど」
「それよりさぁ、早く教室に行かなくていいのかい？
「むっ、そうだな行くぞ」
なんか機嫌悪くなったけど何でだ？
「楽しみだな」
「何がだ？」
「だってさ、ちーちゃんや一夏くんがいるんから楽しくないし面白
くないしさ」
「折原には厳しくいくからな」
「それって、愛のムチかい？」
「あ、愛だと！」
ははは、ちーちゃんを弄るのはとっても楽しいな。
「教室に着いたよ」
「私が呼ぶまでここで待っておけよ」
「分かってるよ」
俺はそこまで子供じゃないんだからきつく言はないで欲しいな。

『げえっ、関羽！？』
教室から一夏くんのバカみたいな声が聞こえてきた。
『誰が、三国志の英雄だ』
やっぱり、あの二人は面白いなそれにこの学校の名簿見た（ハッキング）けど代表候補生が結構いるんだよね。
『入ってこい』
いいところで呼ばれちゃったな。
「失礼しまーす」
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「失礼しまーす」
その言葉とともに入ってきたのはイザヤだった。
「初めまして、折原臨也です。好きなものは人間なんだよ、趣味は考え中なんだよねぇ。スリーサイズは秘密♪」
なんで、イザヤがここに居るんだ。
「キャァアアアアアアァ？」
耳がいてぇぇぇぇぇ！　何でイザヤは平気なんだよ！　耳から何か外したぞ……耳栓してたのかよ！　しかも、こっち見て少し笑ったし。
「かっこいぃぃぃぃ」
「私を苛めて」
「不思議めいていていいい」
周りからイザヤの事を言ってる女子がいるが、最大のライバルが担任にいるんだぜ。
「織斑、何か言ったか？」
「いえ、何も」
危ない、千冬姉に聞かれたら今日が俺の命日なっていたな。
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
原作であれだけ叫んでいたら、耳栓ぐらいは持ってくるよ。

「俺の席は何所ですか？　山田先生」

ここは、あえて山田先生に聞いて見たらちーちゃんが凄い目でこっちを見てきたんだけど。

「お、折原君は窓際の一番後ろです」

「ありがとうございますね」

笑顔でにっこり

「／／／／いえ、これぐらいは」

えっと、ここだったよね。

「よろしくね、イザイザ」

隣の子はのほほんさんだったよ、このキャラ好きなんだよね見ていると楽しいからね。

「よろしく、本音ちゃん」

「何で名前知ってるの～」

「俺は情報屋だからね」

さて、ラウラが来るまでは原作には沿って行きたくないんだけど、セシリアだけボコボコにしたいんだよね。高飛車キャラってこの時代じゃ古いしね、この際あの性格をどうにかしてほしいよね。

「折原、お前はわかるな」

原作だと一夏くんがバカをやったところだね。

「なんなら、説明しましょうか？　ちーちゃん」

「おーりーはーらー学校では織斑先生と呼べ！」

うわ！　怒って、教卓を投げてきたよ。後ろの壁に教卓が突き刺さってるよ。

「嫌だなぁ、ただのスキンシップじゃないですか」

「そこを動くなよ、臨也！」

ウソだろ！　何もない空間から打鉄（うちがね）のブレードが出てくるんだよ！　あんたは何所のディソード使いなんですか！

「なら、捕まえてごらんよ。ちーちゃん」

窓から脱出して全力で走ってるのだが、後ろから追ってくる鬼はブレードを持ったまま飛び降りやがった。

「ふぅ、助かったか」
「あれ、なんでいるの〜」
「窓の溝に掴まってやり過ごしてんだよ」
この高さから落ちれば足の骨は折れるだろう。
「臨也！　お前！」
無傷だと！　しかも、壁を走っているぞ！　この人外が！
「やっぱり、ちーちゃんを弄るのは楽しいなぁ」
笑いながら廊下を走り安全地帯を探したがちーちゃんに捕ったが無傷で帰還したよ。
「いい運動になったよ」
この時、クラスメイトが思ったのは何で、あんな状況で楽しめるのかだった。
「それと、ＩＳの説明だったね――――これぐらいは普通に知ってますよ」
「す、すごいですね。先生まだ、そこまで知りませんよ」
「すごいねイザイザは何でも知ってるんだねぇ〜」
「何でもは知らないよ。知ってることだけだよ」
このセリフは違うアニメだが言ってみたかったんだよねぇ。

久しぶり！

楽しい鬼ごっこが終わり、休み時間になった。
「イザヤ、助けてくれ」
一夏くんは両手を合わせながらお願いをしてきた。
「なら、お金を払ってよ」
俺は手で二を指で示した。
「千円で何とかしてくれ」
「しょうがない、今回だけだよ」
「サンキュー」
はぁ、なんで君はそんなにバカなんだい。
「ちょっと、いいか」
話しかけてきたのは、箒ちゃんだった。
「久しぶりだね、箒ちゃん」
「久しぶりだな、イザヤ」
「見違えたよ、可愛くなったね」
「そ、そうか。そうなんだな」
箒ちゃんの顔は赤くなっていた。
「そうだ、優勝おめでとう」
「何で知ってるんだ！」
そこで、大声を出さないで欲しいな耳が痛いよ。
「俺は情報屋なんだぜ、それくらいは知ってるよ」
「まだ、お前はそんな事をやってるのか？」
「俺は外より家で作業する方がましなんだよ」
「その割には体力あるよな」
前世の体力がそのまま残っていたなんて言えないしね。
「おや、チャイムが鳴ったから戻ろうか」
「逃げるなよ」
一夏くん、止めた方が身の為だね。

「ほら、担任がちーちゃんだからさ」
その言葉で意味が分かったのか、一夏くんはすんなりと袖から手をどけてくれたよ。
「俺のせいで殺しかけてごめん」
一夏くんはあのやり取りがトラウマになったんだね。
「俺はあれぐらいじゃ、死なないよ」
「ごめんな、千冬姉が」
バコン！
「学校では織斑先生だ」
主席簿であんな音がでるなんて、どんだけ力が強いんだよ。
「折原、いらんことを考えるなよ」
鋭い目でにらんできた。
「どうしたんだい俺を見つめて、何かついてるかいちーちゃん」
「み、見つめてどいない」
また、赤くなった熱でもあるのかな？
「俺は少し、しんどいんで保健室に行きます」
ウソだよ、授業なんて受けなくてもできるもん。
「そうだな、いって来い」
さてと、廊下に出たけどどこに行こうかな。
「ねぇ、そこの君今は授業中だよ」
黄色いネクタイをしているから二年だろう、ってあの顔は楯無さんじゃないか。
「やぁ、生徒会長の更識楯無ちゃん」
平然と答えてみた。ここで、変な行動したらすぐにばれるからな。
「初めまして、折原臨也くん」
俺たちは向かい合いながら微笑んだ。
「ちょっと、来てくれるかな」
「よろこんで」
楯無ちゃんについていくと生徒会室の中まで案内され、扉の鍵を閉められた。

「なんで、鍵を掛けるんだい」
「あなたに、依頼したいの」
更識に仕事をもらうが更識の人間がしてくるとは意外だな。
「内容によるかな」
「織斑一夏の秘密を調べてくれるかしら」
「20万で手を打とうかな。それが、妥当だと思うんだけど」
「分かったわ」
契約は完了した、俺の仕事が終わるまでは油断ができないな。
「疲れたよ」
「それじゃ、お茶を飲みましょうよ」
いきなりゆるくなったからついていけないな。
「それじゃ、食堂にでもいこうか」
俺は紳士がエスコートするみたいに右手を差し出した。
「あ、ありがとう」
なんだか、フラグをこの頃立ててるように思うのは気のせいかな?
「そうだ、俺を生徒会に入れてくれないかな？」
「いいわよ」
即答された、本当にこの人は頭が良いのか？
「それなら、役職は何かな？」
「あなたの実力なら、副会長だとおもうわよ」
「なら、これからは授業をサボる為に生徒会室を使わせ貰うよ」
「放課後も来てもらわないとダメよ」
それにしても、この人からは危ない感じがしないな。
「それじゃ、君の顔を見に来るよ楯無ちゃん」
「／／／／お願いね」
その後も、話しながら食堂に行き、お茶を楽しんで教室に戻ったら箒ちゃんとちーちゃんに殴られたよ頭を俺はないかしたかな?

部屋に行ってみようか？

放課後、俺はなんとなく一夏くんの家庭教師をしていた。
「これぐらいなら、分かるかい？」
俺はＩＳの簡単な資料を見せながら言った。
「何となく」
「おいおい、それは勘弁してくれよ」
今、見せているのは『サルでも分かる簡単ＩＳの知識』なんでこんなものがあるかって。そんなのは簡単だよ。最初からこうなる事は分かっていたからさ。
「何で、俺はあれを捨てたんだ！」
「バカだから」
「そうなんだけど、イザヤに言われると傷つく」
楽しいな。
「まだ、いたんですね。よかった」
あれ、このイベントは部屋の鍵ですか？
「どうしたんですか？」
「部屋の鍵を渡しに来ました」
「俺の部屋は何所ですか？」
「お前のは無理に調整して、寮の最上階にした」
いきなり、ちーちゃんが現れて、一夏くんと真耶先生が驚いているよ。
「さすがちーちゃん、俺が好きなところを知ってるね」
「なんで、最上階なんですか？」
「折原は人の下に見られるのが嫌いなんだよ」
「子供みたいですね」
「そうさ、俺は性格は子供なんですよ」
いじけてないよ、だって本当の事を言ってるのだから。
「じゃ、俺は部屋に向かうよ」

さて、鬼の先生から早く離れよう。
「道草しないでくださいね」
この距離でできる訳がないでしょ。
「それにしても俺の部屋はどれくらい広いのかな」
ドアノブを回すと開いていたので入ると目の前に現れたのは。
「お帰りなさい、お風呂にする、それともご飯、それとも私？」
目の前に裸エプロンの楯無ちゃんがいた。たぶん、水着を着てるよね。
「それじゃ、どうしようかな」
ドアを閉めて鍵を掛けた。
「よし決めた。君にしようかな」
俺は楯無ちゃんを押し倒して馬乗りする。
「え！」
楯無ちゃんはいきなりの事で驚いていた。
「君が誘ったんだよ。やめなんてしないからね」
俺は微笑みながら言った。
「／／／／／」
楯無ちゃんは目を閉じた。
カシャ！
「良い顔が撮れたよ」
俺の手にはデジカメがあった。
「覚悟して損した」
「可愛い顔してたよ」
「け、消して／／／／／」
凄く照れていて可愛いな。
「なんで、ここに居るんだい？」
俺はまだ、馬乗りの状態で聞いてみた。
「生徒会長の特権で相部屋にしてみました」
だから、お風呂があり、トイレがあり、台所があるとても便利な部屋なんだね。

「これからよろしく」
微笑みながら言った。
「それより、どいてくれない？」
「嫌だよ、今日は疲れたからこのまま寝ようかな」
耳元でささやいてみた。
「ひゃぁ！」
「さて、ベットで続きをしようか」
俺は楯無ちゃんをお姫様抱っこをした。
「本当にするの？」
「するわけないじゃん。だって、俺はまだ１８歳だからね」
「何歳ならいいの？」
「満１８歳」
「今何歳なの？」
「永遠の１８歳だよ」
「おかしくない」
「おかしくないよ、１８ったら、１８歳なんだよ」
永遠の１８は俺のだけが使っていいんだよ。
「さて、寝ようかな」
「別々に？」
「一緒に寝たかったら、寝たらいいよ」
この夜は楯無ちゃんと一緒に寝ました。

クラス代表？

俺は朝起きるとすぐさま着替え食堂に行った。なぜなら、昨日は変なテイションでいろいろやってしまったからな。
「おはよう」
俺が挨拶したのは箒ちゃんと一夏くんだよ。
「おはよう」
「……おはよう」
なんだか箒ちゃんの機嫌がよくないな。
「一夏くん、何かあったのか」
俺は一夏くんの耳元でささやいた。
「昨日からああなんだ」
「一夏くん何かしたのかい」
「部屋に行ったら、バスタオル姿の箒が出てきたんだよ」
「諦めて警察に自主しようか」
「覗きじゃ、ないから」
忘れてたけど俺の格好は昨日と一緒なんだよ。
「それにしても、何で制服じゃないんだ」
「皆と同じ服なんか着たくないから」
「その格好、小学生からかわってないな」
「そうだね、中学は行ってないからね」
「まじかよ」
「池袋に居た時は情報屋の仕事で大変だったんだよ、それに妹達と同じ学校に行くなんて嫌だからね」
「お前の妹嫌いは治ってないな」
妹なんて俺にとって邪魔な存在だからね。
「それより、チャイムが鳴る前に教室に行こうか」
気づいたらあと五分で予冷がなる前だった。
「今からＳＨＲを始める前にクラス代表を決める、誰か立候補しろ」

ちーちゃんのその発言を俺は待っていた。
「一夏くんが良いと思いまーす」
「それがいいね～」
本音ちゃんも賛成してくれた。
「なに、それなら俺はイザヤを推薦する」
「良い度胸だね、一夏くんが俺に勝てるでもいうのかい？」
「生意気言ってすみません」
一夏くんは魂がこもった土下座をした。
「折原と織斑の二人だけか」
「納得いきませんわ」
来たか、高飛車アホ女！　君が名乗り出ることを俺は待っていた！
俺は君のその自信に満ち溢れた慢心な心をぶち壊したくてしょうがなかったんだよね。原作読んでいて近接が弱いの攻撃していくようなバカにはいい薬だが、俺は人の心を折るのが最も楽しい遊びなんだよ。
「それなら、俺は君の心を折ろうかな」
その間もセシリアと一夏くんの言い争いになっていた。
席から立ち、どこからかナイフを右手にもった。
「勝負は来週の月曜日だ。折原、ナイフを早しまえ」
「何言ってるんですか、これはＩＳですよ」
「え！　折原君はもう専用機持ってるの」
「俺はとっても信頼しているＩＳの技術者を知っているからね」
一応このＩＳは束ちゃんが製作した、第四世代のＩＳなんだよね。
「これで、君と俺は同等じゃなく、俺の方が強いよ高飛車さん」
「私だって専用機を持っていますわよ」
「その話じゃないよ、俺が言ってるのは君と俺の力の差だよ」
「何言ってるの折原君、男子が強いには昔の話だよ」
その言葉を聞いて俺は笑い出した。
「アハハハハハ、俺は他の人に下に見られるのが嫌いなんだよね。だから、そんな意味が分からない事はぶち壊したくなるんだよね」

「いいですわ、あなたのその自信を壊してやりますわ」
「やってみなよ」
これは来週が楽しみだな、クラス代表の件は生徒会の仕事が大変やらでパスすればいいしね。
「楽しみに待っているよ」
そのまま、休み時間に入った。
「一夏くん、頑張れ」
「お前もだろ」
「俺は勝てるから良いんだよ」
「はぁ、俺はどうしようかな」
「箒ちゃんに剣道でも教えて貰ったら？」
「なんで、そこで私が出てくる！」
いつの間にか後ろにいて驚いたよ。
「教えてくれないかな、箒ちゃん」
いつものように耳元で囁いた。
「イザヤが言うのなら仕方がないな」
ニヤリ！　これで、すべての物語が俺の手のひら操れるな。

試合は迅速に行うべき（前書き）

そろそろ、前期末テストなんだよね。赤点採ったら留年決定なんだよね。
「勉強したらどうなんだい」
するよ、保健と製図だけ。
「なんで、保健なんだい」
保健しか点が取れないから？
「前回はなんてんだった？」
満点に決まってるじゃないか？
「変態だね」
残念だがそこが今回のテスト範囲なんだ！
「誰か、作者に勉強をするように説得してくれ」
だが、断る！

試合は迅速に行うべき

セシリアちゃんと一夏くんの試合が終わった。なに、時間の進みが早いってそんなのきまってるじゃないか！　男の練習風景を見て喜ぶ男子がどこに居るんだ！
「お前はバカだな」
ちーちゃんは一夏くんを苛めているよ。
「ちーちゃん、暇だから先に行って準備していいかな？」
「そうだな、オルコットは装備の補給があるからな」
俺はすぐさまＩＳを展開しアリーナに行こうとした。
「それが、イザヤのＩＳか」
俺の格好はいつもの服の上に黒く薄い装甲が纏っているだけだ。
「それにしてもそれがＩＳスーツなんて」
「この格好が落ち着くからね」
特注品なんだよ、それは置いといて早くアリーナに行こう。
「アリーナに来たけど何しようかな」
まずは、武器の確認『影』だけだった。それにこの武器は色んな形状になる事が出来るみたいだ。
「楽しい事を始めようかな？」
何をしたかは、戦闘が始まってからのお楽しだよ。
「これで、配置は完了したね」
「待たしましたわ」
うわ！　高飛車が現れた。イザヤの行動は戦いを始める。
「待たせないでくれよ」
俺は影をナイフの形状にして構えた。
「そんな武器で勝てると思っているのですか？」
「勝てるさ」
ブザーが鳴ったとともにセシリアがスターライトｍｋ？を構えるがそれは撃つ前に粉々になった。

「どうしたんだい？　その武器は見せかけかい？」
「これでけではありませんわ」
ブルーティアーズを飛ばしたがそれもイザヤを撃とうとした瞬間に爆発した。
「何が起きましたの？」
「これで、お終いかい？」
「ま、まだですわ！」
近接武器を出した瞬間に武器は粉々になった。
「ま、またですわ」
「これで、君の武器は無くなった」
「何をしたんですか」
イザヤは悪魔のような笑みを見せた。
「しょうがないな、俺の武器はこのＩＳから出ている黒い影が武器なんだよ。これは色んな物質に変えることもできるんだよ、だからこのアリーナ一帯に細い糸を張ったんだよ」
イザヤが指を鳴らすとアリーナに見えていなかった黒い糸が姿を現した。
「そ、そんな」
「これで、俺の勝ちだね」
イザヤは何も出来ないセシリアを地面に向かって投げ、近くまできて呟いた。
「俺には女の子を殴る趣味はないけど……だから、君のＩＳを踏むことを新しい趣味にするよ」
そう言いながら、イザヤは片足を高くあげ踏む体制を採りそのまま足を下に下した。
「アハハハハハハハハハハハハハ」
その姿はまるで子供が無邪気に遊んでいるような声だった。
「アハハハハハハハハハハハハハ……飽きちゃった。ＩＳを踏み潰す趣味はもう止めよう」
イザヤの行動が止まったのはいいがセシリアのＩＳはほとんどが

壊れていた。
「君じゃあ俺の快楽にはならない」
その言葉を吐き、ビットに戻った。
「ただいま」
「やりすぎだ！」
一夏くんの声が聞こえてきた。
「あれは何だ！」
「今度は一夏くんが俺の快楽を満たしてくれるのかい？」
「うるさいな、俺は普通に戦っただけだよ」
「お前は加減が出来ないのか」
「手加減は無しだからね」
「やっぱりお前はおかしい！」
これでいい、俺は初めから君とは相性が悪いからね。それに、この性格は君が最も嫌いな性格だからね。だから俺はこの性格のまま生きてきたんだよ。
「それじゃ、俺は部屋に戻るよ」
そのまま寮に帰りたっちゃんで遊び寝た。

遊びはゆっくりと

「クラス代表は織斑一夏に決まった」
「なんで、俺なんですか？」
一夏くんは驚きながらちーちゃんに聞いた。
「それは、オルコットのＩＳは修理に出しているからな」
「なら、イザヤなら」
「俺は生徒会で忙しいからパスしたんだよ」
「なんだと！」
だって、俺はめんどくさいのはパスなんだよね。
「それじゃ、俺は生徒会の用があるから失礼します」
教室から出て、向かった先は生徒会室ではなくＩＳ整備室に向かった。
「ここに、彼女がいるのか」
さて、ここから俺がＩＳの物語を壊していこうか！
「いるかい、更識簪ちゃん」
俺は部屋に入り女の子に話しかけた。
「……あなたは誰？」
「警戒しなくていいよ。俺は折原臨也、君の恨みの対象を嫌っている人物さ」
「……恨みの対象？」
俺は微笑みながら言った。
その言葉は静かに整備室に響いた。
「織斑一夏……」
「……用は何？」
「君に今度、行はれるクラス対抗戦に出て貰おうと思うんだよ」
「……まだ、ＩＳは出来ていない」
「その点は問題ないよ。ここに俺が各国のＩＳ情報をクラックして纏めた物を君にあげるよ」

俺はそのままUSBを彼女に渡した。
「……なんで、くれるの」
「俺は一夏くんの事が大っ嫌いなんだよ。だから、君に手伝って欲しいからね」
「……自分でしないの？」
「クラスが一緒だから出来ないいいんだ。それに、俺は君に興味があるからね」
「……興味？」
「そうだよ。俺は君がたっちゃんの妹だから日本代表候補生になったとは俺は思はない、それは君が手に入れたものだと俺は思う」
「……私の実力？」
「そう、君の実力だよ。だから、君の力を俺に貸してくれないかな」
俺は手を伸ばしながら言った。
「俺には君の力が必要なんだ」
「……そんな事、初めて言われた」
「力を貸してくれるかい？」
「うん……」
「それじゃ、よろしくね、簪ちゃん。俺の事はイザヤって呼んでいいから」
「わかった……イザヤ」
「俺と君は同じ目的をもった仲間だよ」
「仲間……」
「俺もISを作るのを手伝うから必要な時にここに連絡をいれなよ」
俺は連絡先とチャットのURLを渡した。

チャットルーム（深夜）
――甘楽さんが入室されました――
《皆さんのアイドル甘楽ちゃんが帰ってきましたよ》
『どうにかならんのかその口調は』
［お帰り～寂しかったよ］

《ここ最近忙しかったので来れませんでした》
『いいから、その口調をどうにかしろ！　虫唾が走る』
《酷いなー鬼さんは怒りん坊さんなんですか？》
――――情報さんが入室されました――――
《新顔さんだね。はじめまして》
（初めまして）
［初めまして～］
『初めてだな、私は忙しいから落ちる』
――――鬼さんが退室されました――――
（甘楽さんの性別はどちらなんですか？）
［甘甘、やっぱその口調は変だよ］
《あの人はほっといて、ガールズトークを楽しみましょうよ》
［男だよ］
《違いますからね、ウサギさんウソを教えないでください》
（面白いですね）
［これがこのチャットのたのしむところだかね～］
《ウサギさん、漢字に変換してくださいよ。読みにくいです》
（そうですねｗｗｗ）
［酷いよ、私だって忘れることだってあるんだよ！　怒ったから今日は帰る（怒）］
――――ウサギさんが退室されました――――
（すいません）
《ほとんど帰ったので私たちも落ちましょうか》
《謝らないでください》
――――情報さんが退室されました――――
――――甘楽さんが退室されました――――

「物語は俺の手で作り変えるよ」
「どうしたの？」
「これから、楽しい事がはじめるかね。たっちゃん」

微笑みながら言った。
「どんなことかしら」
「とても、楽しい事だよ」
「それは楽しそうね」
それはとても楽し楽しい原作崩壊の第一歩だよ。

作戦は計画的に（前書き）

皆さんのおかげでお気に入り件数が３桁になりました。とても嬉しいです。

作戦は計画的に

今日は簪ちゃんの所に遊びに行こうかな。
「ＩＳの出来はどうだい？」
「ギリギリできるか分からない」
簪ちゃんはディスプレイから目を離しこちらを向いた。
「別に今回が駄目でも学年別トーナメントがあるからゆっくりと作っていこうか」
「何とか間に合わせてみせる……」
「なら、この情報は持ってきて正解だったかな？」
「こんなことして…大丈夫かな……」
「大丈夫、それは俺が信頼する人からもらった物だから」
俺は資料を簪ちゃんに渡した。
そう、頭のネジが何本か抜けた人にね。
「なら、頑張る」
「そうだね。あと、数日しか無いからね」
最近、二組に転校生が来たとか言っていたな。俺には全く関係が無いし、ただの中国代表候補生なんていなくても変わらないからね。
「イザヤも手伝った」
「いいよ。それに、俺が頼んだことだからね」
俺が手伝う頃にはほとんどが完成していて、原作よりも早くできるのではないかと思った。
「……あのデータすごく役にたちました」
「クラックしたかいがあって良かったよ」
「本当に私で良いんですか？」
「自信が無いのかい？」
計画に支障がない程度に頼むよ。それに、近頃ドイツからあの子が来るからね。

「……少しだけ」
「大丈夫さ、君ならやってのけるって信じてるから」
「あ…ありがとう」
簪ちゃんの顔は少し赤かったけど、この部屋って暑いのかな。
「さて、早く完成させて試験動作をしないとね」
試験動作をしないとどこがダメなのか全くわからないからね。
「あと数時間で完成する」
やっぱり、この子に頼んで正解かな。
「俺はアリーナの貸切を教師に頼みに行こうかな」
「出来るの？」
「出来るさ、俺は生徒会副会長なんだよ」
「せ、生徒会！？」
お姉さんのことが引っかかるのかな。
「安心しなよ、俺は君を裏切らない」
俺は静かに整備室から出た。
「……あの人はとっても優しい」
簪の声は整備室に静かに響いた。
「どうしたんだい？　たっちゃん」
整備室からでたら、たっちゃんがいた。
「一夏くんの資料をもらいにね」
「忘れていたよ、コレが彼に関する資料だよ」
ＵＳＢをたっちゃんに手渡した。
「お金の方は口座に振り込んでおいたから」
「俺は用事があるから行くよ」
「じゃあまた部屋で」
俺は職員室に行くとちーちゃんに怒られた。
「なんで、お前は授業に出ないんだ！」
「面倒だから？」
「なんで、疑問形なんだ！」
「怒るなよちーちゃん、怒ると婚期逃がすぜ」

「よ、余計なお世話だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
「怒りながら教師用の机を投げないでくれよ」
当たると死んじゃうよ。
「いざや！」
「第二アリーナに借りるから誰も入れないだね」
「逃げるなー」
聞こえない。なにも聞こえないなー
「準備は出来たかい」
「今、出来た」
帰った時には準備までできていた。これはさすがに驚いた。
「さて、試運転に行こうか」
第二アリーナに行くと三人の影が見える。
「そこの三人すまないけど、出てくれないかい」
「申請している人がいたんですかすみません」
誤ったのは一夏くんだった。
「今から忙しいから早くしてくれよ」
「って！　イザヤかよ」
そこで驚かれても困るよ。
「何かするのか」
箒ちゃんが話しかけてきた。
「ほらね」
丁度その時、簪ちゃんが来た。
「今からＩＳのテストをするからね」
「でも、ここは私たちが先に使っていたのですわ」
セシリアが何か言ったがこんな負け犬に構っている暇はあまりないから早く出てもらうか。
「負け犬は静かにしといてくれないかな？　それに、ここじゃなくても練習は出来るんだし」
「その言い方は無いだろ、イザヤ」
「五月蝿いな、俺はそこの負け犬には全く興味が無いんだよね。て

か、見ているのが嫌なんだよね見苦しい」
「イザヤ、言い過ぎだ」
「言い過ぎ？　何言ってるんだい、敗者は勝者に従うのがルールじゃないか」
「なら、今から俺と戦え！　負けたらセシリアに謝れ」
「しょうがないな。簪ちゃん、三分だけ待っといてくれるかな」
一夏くんはすでにＩＳを纏って戦闘態勢に入っていた。
「面倒くさいな」
俺は瞬時にＩＳを纏った。
「始めようか」
今回は『影』を大鎌に変えた。
「それで勝てるのか？」
「戦闘中に敵に話しかけるもはいけないな」
俺は大鎌を振るった。
「そんなもの」
一夏くんは雪片弐型で受け止めようとしたが……
「それは、無駄だよ」
大鎌は雪片弐型をすり抜けた。
「なに！」
「終わりだね」
一夏くんはアリーナの壁に激突した。
「さて、敗者は速やかに退場してもらおうか」
簪ちゃんがこちらに近寄ってきた。
「今のはなんだ」
「俺の武器は『影』なんだぜ、すり抜けるぐらいは当たり前だね」
「なぜ、あそこまでする」
「力の差を見せるため？」
「昔のお前はそんなんじゃなかった」
「それより早く出てくれよ、目障りだ」
これでやっと試運転ができる。

「あれでいいの？」
簪ちゃんは近寄り呟いた。
「心配してくれてありがとう」
打鉄弐式の試運転は成功に終わり後は武装の細かなチェックだけになった。
「これで俺の作戦は上手くいく」
「手伝ったくれて……ありがとう」
「これは君の力で作ったんだ。俺は何もしていない、また明日」
俺は笑いながらアリーナを後にする。

やりすぎはご注意下さい！（前書き）

テスト一週間前になったので投稿するのが遅くなります。

やりすぎはご注意下さい！

それにしても、世界は詰まらな。俺はもっと楽しい世界が見たいな。
「イザヤ、準備ができた」
簪ちゃんは打鉄弐式を纏っていた。
「これで、君の実力を見せる舞台が整った！」
俺はアリーナの外で喜びながら叫んだ。
「さて、この戦闘を否定しようか！」
上空からアリーナに砲撃が降ってきた。
「行こうか、簪ちゃん」
「……うん」
俺はＩＳを展開しアリーナの壁を壊しながら進んで行った。
「脆いなこれじゃ直ぐに侵入されるよ」
アリーナの最後の壁は少し固かったが呆気なく壊れた。
「簪ちゃん、俺がサポートするから楽しんできなよ」
簪ちゃんはゴーレムにミサイルを撃ち込んだ。
「何しにきたんだよ、イザヤ」
一夏くんが寄ってきた。
「何って、遊びにきたんだよ」
「ふざけてるのか！」
「ふざけてないけど？」
「じゃあなんであの子が戦ってんだよ！」
一夏くんは簪ちゃんを見ながら言った。
「お前は何もしないのか」
「これは、簪ちゃんの自信をつける為の戦闘だ。俺は今回は傍観に徹するさ」
簪ちゃんはゴーレムに今は勝っている。
「さて、簪ちゃんは頑張ったし、これでいいだろう」

俺は『影』を針状にしてゴーレムの手足に突き刺し地面に屈服させた。
「君は無人機なんだよね、ならこれぐらいの事はいいよね」
俺は『影』をギロチンにかえゴーレムの首の所にセットした。
「バイバイ」
ゴーレムの顔は宙に舞った。
「人間だったら楽しいだろうね」
その声はＩＳに乗っている者にしか聞こえなかった。
「帰ろうか、簪ちゃん」
そのままアリーナを後にした。
「頑張ったね。簪ちゃん」
「い、イザヤのおかげです」
簪ちゃんは誉められたのが嬉しいのか頬を赤く染めていた。
「作戦は順調に進んでいるね」
「作戦？」
「とっても愉快な作戦なんだよね。今は秘密だけど」
「誰もいないね」
俺は寮の屋上に足を運んだ。
俺は携帯を取り出し電話をかけた。
『楽しかった？　イザくん』
「微妙かな、束ちゃん」
『酷いな、愛しのイザくんの為に頑張ったのに』
「それは感謝してるよ。作戦は順調だね」
『そうだね、彼女も待ってるよ』
「彼女は危険だからね。それじゃあ、作戦を第二段階に移行しようか」
『了解（｀∇´ゞ』
「それじゃあ、エル・プサイ・コングルゥ」
俺は携帯を切りまた、電話をかけた。
『何のようだイザヤ』

「怒らないでくれよ自称魔法少女ちゃん」
『だれが、自称魔法少女だ！』
「もう、何も怖くないだっけ？」
『それは、違うアニメだ！』
「君の声を聞いて安心したよ」
『／／／／いきなりなんだ』
「君を使うのは第三段階からだよ、マドカちゃん」
『それだけの為に電話したのか』
「いけないかな？　自称魔法少女ちゃん」
『だから私は自称魔法少女じゃない！』
からかいがいがあるから楽しいな。
「また、かけるよ」
電話を切り自室に戻った。
「遅かったね、イザヤくん」
部屋に戻ったらシャツ一枚のたっちゃんがいた。
「今日は楽しめたよ」
「目をつむるのは今回だけよ」
その顔はいつもの顔ではなく生徒会長としての顔だった。
「それは困るな」
俺はたっちゃんの顎に手を添えキスをするような格好になっている。
「一応、イザヤくんも生徒会なんだから」
「わかってるよ」
「あなたの狙いはなに？」
「今は君の心かな？」
「真面目に答えて」
「これが、答えだよ」
俺はたっちゃんの唇にキスをした。
「それは、本当のキス？」
「俺は特別好きな人じゃないとしないな」

「あと、何人居るの？」
「今はまだ五人かな？」
「増えるの？」
「俺の愛がある限りね」
そのまま、ベッドに移動した。

PV6万アクセス記念（前書き）

今回はこの話を作る際にできたストーリーを載せました。人気があればこれを新しく投稿するつもりです

ＰＶ６万アクセス記念

初めまして、森野亮士ッス。今回はＰＶ６万記念で作者がこの作品を作った際にできたボツ作品を番外編を使ってもらうことになったッス。
では、『もし、ＩＳ学園に亮士くんが来たら』ッス。

神様に人生をやりなをさせもらっているんだが、よりによってオオカミさんの亮士に生まれ変わってるんだ。編入先がＩＳ学園なんて。
「待たせたな」
そこに現れたのは織斑さんでしたス。
「お、お久しぶりです、織斑先生」
「久しぶりだな、森野」
一応、小学校まで一夏さんと同じ小学校に通っていたんスよ。
「ひぃ！　見ないで下さいっス」
「治ってないのか、まぁいい時間が押しているから行くぞ」
俺はビクビクしながら千冬さんね後ろをついていったッス。
「ここがお前の教室一組だ。私が合図したら入ってこい」
「はいッス」
千冬さんが教室ですごい音がした。
『何するんだよ、千冬姉』
『織斑先生と呼べ』
また、すごい音が聞こえ俺は一夏に向かって合掌した。
『今日、編入生が来た。入ってこい森野』
俺は教室に入り教壇に立ち挨拶をしたッス。
「は、初めまして、森野亮士です。趣味は特にないっス」

『『『ジッー』』』

「いっいやぁぁ～見ないで見ないでっ！！　見ないでほしいっス！！！」

「意外に可愛いかも」

俺の平穏はどうなるんっスかぁぁぁぁぁぁぁ！！

転校生で遊ぼうか？（前書き）

修正させてもらいました

転校生で遊ぼうか？

今日は学園の方に登校しますよ。なんでって、ほら今日は二人の転校生が来るからじゃないか。
「遅れました～ちーちゃん」
遅れた理由は女子の騒ぎ声が聞きたくなかったから？
「イザヤ！　今何時だと思っている」
主席簿を投げられ頭に直撃した。
「痛いじゃないか、ちーちゃん」
俺は頭を抑えながら席についた。
「珍しいね、イザイザがクラスに顔を見せるなんて～」
のほほんさんが笑顔で話しかけてきた。
「なんだか、面白いものが見れそうな気がしたから」
「イザイザの予想は当たるもんね」
パァッン！　一夏くんがラウラちゃんに平手をされていた。
「デュノアの面倒は折原と織斑に任せる」
さて、俺は逃げる準備を始めるか。
「頑張ってね、イザイザ」
「まぁ、頑張るよ」
一人で教室を出ようとすると。
「イザヤ、一人で逃げるなよ」
一夏くんの手が肩に置かれていた。
「これは、新手のビックリかい？」
「逃がさねぇぞ」
結局、三人で更衣室に目指すことになった。
「俺は面倒ごとは嫌いなんだけどな」
「嘘をつくな、事件の中心にはいつもイザヤがいただろ」
廊下を曲がろうとしたら一人の女子生徒に出会った。
「者共であえー」

しょうがない、ここは一夏くんをおとりに使うか。
「シャルルちゃん、舌を噛むなよ」
俺はシャルルちゃんをお姫様抱っこで抱え女子軍団の前まで行き叫んだ。
「生徒会副会長が命じる！　俺とシャルルちゃんを全力で通せ！」
「「「Ｙｅｓ，ｍｙ　ｌｏｒｄ！」」」
真ん中に道ができ、そこを走りながら呟いた。
「一夏くんは通さなくていいよ」
女子の目は獲物を狩る獣の目だった。
「さて、時間もたっぷりあるからお話しようか。シャルロット・デュノアちゃん」
更衣室にその声は静かに響いた。
「何で、その名を知ってるの」
シャルロットちゃんの顔は青くなっていた。
「俺が折原臨也だから」
「あなたが、情報屋のですか」
「俺のこと知ってるなんて、嬉しいな。これが、君が欲しがってる物だよ」
俺はＵＳＢを取り出し見せつけた。
「欲しいかい？　白式、甲龍、ブルーティアーズのデータが」
シャルロットちゃんは頷いた。
「あげるよいらないし」
俺はＵＳＢを投げた。
「あなたは彼らの友達じゃないの」
「なんで、俺が一夏くんの友達になるのかないらつくよ」
「あなたは何がしたいんですか？」
「いいのかい、コレを聞くと君は俺の監視を受けることになるよ」
「止めて置きます」
「でも、俺は君に興味を持ったからよろしく。イザヤって呼んでいいよ」

「わかりました」
「敬語なんてやめてくれよ。それより行こうか、ちーちゃんは怒ると怖いからさ」
シャルロットはイザヤは優しい人なのかと思った。

鬼の出現？

「シャルルちゃん、俺眠るから何かあったら起こしてね」
だって、アリーナって面倒じゃないか。
「僕は知らないからね」
それでも寝かしてくれるんだね。

スコン！
「何するんだよ、ちーちゃん」
頭を抑えながら言った。
「私の授業で寝るからだ。それに織斑先生だ」
「いや、ちーちゃんはちーちゃんじゃんそれ以外に呼び名ってあったけ？」
「怒りたい所だが、今から凰、オルコットが射撃の訓練の実践を行うから見ていろ！」
「負け犬対先生か、楽しそうだな」
「誰が、負け犬よ！　私はまだ、誰にも負けてないわよ！」
おチビちゃんが叫んだ。
「今回、負けると俺は予想するよ」
「あんた昔から変わってないわね」
「変わる方が珍しぃよ」
「早く始めんか！」
俺は戦闘が終わるまで、ちーちゃんをいじろうかな？
「怒ると小じわが増えるよ、ちーちゃん」
「イザヤ！　今日は許さん」
ちーちゃんは打鉄のブレードを持って襲ってきた。
「それが当たったら、俺が死んじゃうじゃないか」

「死ね！　生憎ここは法律を無視できるからな」
目が本気なんですけど。
「そろそろ、戦闘が終わるよ」
「知るか！　今はお前を殺すことが優先だ！」
危なくなったらデュラハンを展開したらいいし。
「覚悟！」
デュラハンを展開しようとしたら、水がブレードを受け止めていた。
「助かったよ、たっちゃん」
イザヤの後ろの方から『ミステリアス・レイディ』を展開しているたっちゃんが現れた。
「死なれたら、おねーさん悲しいから」
「授業はどうした、更識」
「好きな人を守るのに理由なんて必要ですか？」
二人とも戦闘体制に入った。
「山田先生、授業を再開しましょうか」
「えっ、ほっといていいんですか」
「時間がもったいないじゃないか」
「今日はＩＳの起動と動作をしてもらいます。主席番号順に専用機持ちの所に行って下さい」
俺のとこに箒ちゃんがいるな、何でだろ。
「さて、やろうか」
「「「はい」」」
「俺は素直な子は大好きだよ」
ニコリ微笑んだ瞬間、折原に女子は赤面になった。
「次は誰かな？」
「私だ」
「箒ちゃんか、ＩＳが立ったまま降りたから連れて行ってあげるよ」
お姫様抱っこで運びます。
「イザヤ、久しぶりに屋上でお昼を一緒に食べないか？」

「いいよ」
「本当か！？」
「嘘はつかないよ」
そのまま昼休みになった。
「なぜ、こうなる」
俺の周りにはたっちゃん、簪ちゃんがいて一夏くんハーレムがいてシャルルちゃんがいます。
「何で、お姉ちゃんが居るの？」
「簪ちゃん、恋は姉妹だろうと手加減はないよ」
この場に新しい修羅場ができていた。
「姉妹は仲良くしないとｗｗｗ」
イザヤは笑いながらお昼を過ごした。

俺について、話をしようか（前書き）

明日、基礎製図検定なんだよね

俺について、話をしようか

「さて、今日はたっちゃんは忙しくて居ないみたいだし何しようかな？」
コン、コン！　イザヤの部屋に誰かが来た。
「誰かな？」
イザヤはゆっくり扉に近づき扉を開けた。
「どうしたんだい？　箒ちゃん」
扉の開けた先には箒ちゃんが立っていた。
「い、イザヤ！　今度行われる学年別トーナメントで優勝できたら、付き合って欲しい！」
「それは、男女の仲になりたいってこと？」
箒ちゃんは頷いた。
「優勝できたら、付き合ってあげるよ」
「本当か！？」
箒ちゃんはイザヤの両肩を掴みながら言った。
「本当だから離してくれないかな、骨が軋んでいるんだけど」
イザヤの両肩からミシミシと鳴っていた。
「嘘じゃないな」
「お願いだから、離してくれないかな？」
「す、済まない」
イザヤは両肩を動かし異常がないのを確認をした。
「この学園はある意味、怖いな」
「何か、言ったか？」
「いや、なにも」
余り、凶暴なことは伏せておこう。俺の命が足りないな。
「それだけかい？」
「あと、今のイザヤの事を聞かせて欲しい。何で、お前はそこまで歪んでいるんだ？」

今の俺は折原臨也を演じている人だからな。
「それは、君には関係がないことだよ。好奇心は猫をも殺す、だぜ」
「それでも、私は聞きたい。今のお前は何であんなに酷いことをするんだ」
今はまだ（・・）話せない、箒にこの話をするのは時期が違う。
「こうならなければ俺は俺という人物を消していたぐらいかな」
「意味が分からないぞ！」
「意味が分からなく言っているんだよ」
「私は今のお前が分からない」
「それで、さっきの約束するんだい」
「お前の隠してる事を聞くためだ」
「頑張ってくれよ、俺は箒ちゃんも好きだからね。応援をしているよ」
俺は扉を閉めて箒ちゃんとの会話を自分から止めた。
「あんな事を聞いてくるとは思わなかったな」
今日はイザヤらしくないな、たまには自分らしく生きてみようかな。いや、俺はあの日決めた筈だ、自分を捨てるって。
「イザイザ居る～」
この声はのほほんさんかな。
「どうしたんだい、のほほんさん」
「暇だったから遊びに来たよ」
無邪気に話しかけられ少し安心した。
「どうしたんだい？」
「イザイザがつらそうだったから慰めに来た」
「辛そう？」
「そうだよ、いつもより辛く見えたから」
「君はすごいね。でも、俺は辛くないから心配しないでいいよ」
「たまには、本音を言わないと疲れるよ」
俺は驚いた、何ヶ月しか接していないのにここまで知られるとは思わなかったな。

「それじゃ、俺と話をしないか？」
「いいよ〜」
彼女を部屋に入れ椅子に座らせた。
「俺はある小説の主人公が嫌いだったんだ。誰からかの気持ちに鈍く自分を守ってる様に見えて嫌いだったんだ。それに似た人物を傷つけるには今の性格になるしかなかった、これのお陰で人を騙すとに悪意が感じなくなったんだ。俺は人を好きになるしかなかったんだ、人が俺のことを好きになるにはこれしかなかったんだ」
「大変だったね」
「俺はこのまま過ごしていていいのかな？」
「イザイザの好きなようにすればいいよ」
「話を聞いてくれてありがとうね」
俺はお礼をし話を終わろうとした。
「本音が言いたかったら、いつでも呼んでね。私はイザイザが好きだから」
その言葉はイザヤではない、今の俺にはとっても嬉しいな言葉だった。
「今の俺は君が一番好きだよ」
「ありがとね。できれば、もう一人のイザイザも好きになってくれてもい〜よ」
「それには、好感度が足りないかな」
「酷いな〜」
「俺の方は気に入った人間しか好きになれないんだよ」
久しぶりに自分を出せたのはとても楽しかった。また、自分を出す日が来たらいいな。

イジメは嫌いなんだよね（前書き）

ＰＶ１０万記念でイザヤとヒロインとのデートを書きたいのですが、そのヒロイン一人だけを皆さんに決めてもらおうと思います。
　なのでこの中から選んで感想に投票して下さい。期限は１０月６日までです。

　ヒロイン
東さん
ちーちゃん
山田先生
楯無さん
簪ちゃん
のほほん
シャル
ラウラ
マドカ
の中から選んで下さい。お願いします。

イジメは嫌いなんだよね

さて、今俺は暗い部屋に監禁されました。なんで、監禁かってそれはね。
「授業面倒だし、久しぶりに池袋に行こうかな。たしか、今日はラウラちゃんが代表候補生の二人をやる日だったね」
正直面倒だ、久しぶりには俺を楽しみたいんだよね。
「どこに行こうとしている？」
俺の後ろには怖い鬼さんが降臨していた。
「無断外出かな？」
「ほぉ、私の授業をボイコットして遊びに行くとはな」
「まだ、門をでていないからセーフ？」
そろそろ、走る準備をした方がいいな。
「今日は逃がさんぞ」
「だが、断る！」
予定を変更して、どこに逃げようかな。
「待たんか、イザヤ！」
なんで、いつも打鉄のブレードを持って走るんですか？　あなたは、チートですか？
「後少し」
今、俺が目指しているのは勝手に学園に作った『非公式新聞部』の秘密部屋だ！
『イザヤはどこに行った』
助かった、これも杉並の力だな。
「しょうがない、今日は学園に仕掛けた盗聴器で面白い情報を探ろうかな？」
その時、携帯にメールが届いた。
Ｆｒｏｍ楯無
『盗聴器全部外しといたから♪　今度したら許さないぞ☆』

生徒会長には勝てないのか、杉並よ。

こんな感じで小さな部屋に監禁しているんです。自分自身で。
「暇だな、アリーナに行こうかな」
行ったら戦闘に巻き込まれるしな。痛いの嫌なんだよね。
「諦めて、ラウラちゃんを倒しに行こうかな」
鈍い足取りでアリーナに向かったが途中で止まった。
「楽しい、原作ブレイクができるじゃないか」
イザヤはウキウキしながらアリーナに向かった。
「やってる、やってる」
ピットの陰から覗いているが面白くない戦闘が行われていた。
「それじゃ、狙い撃つぜ？」
デュラハンを展開し、『影』をスナイパーライフルに変えて、セシリアと鈴に照準を合わせトリガーをひいた。
音もなくその弾丸は二人の装甲に被弾した。
「後はこれにこれを足すと」
また、撃つが二人は全く気づかない。それは、弾丸がとっても小さく被弾しても機械が反応しない。
「遊びはこうじゃないと」
イザヤは撃ち続ける。
「そろそろ、行こうかな」
イザヤは静かにアリーナに降りた。
「初めまして、俺は折原臨也よろしく」
イザヤは普通にラウラに挨拶をした。
「なぜ、貴様が居る」

ラウラは鈴の首を絞めながらイザヤの方を向いた。
「ここにいるから？」
「この二人を助けに来たのか？」
「まさか、俺が負け犬を助けに来るわけないじゃないか。俺は君の邪魔をしに来たんだよ。知ってた、この二人のエネルギーを削ったのは俺なんだよね」
「嘘をつくな！　貴様は今ここに来たばかりだろ！」
「いや、俺はずっとピットから二人を撃ち続けていた」
イザヤは笑いながら近づいた。
「俺と遊ばないかい」
「貴様と遊ぶ暇はない！」
「一夏くんを殺せるって言ったらどうする？」
「詳しく聞かせて貰おうか」
「ラウラちゃんがトウナメント前にことを犯したから多分、ルールが変わると思うんだ。タッグ式にね」
「それで、私に特はあるのか？」
「俺と組んだらだれにも邪魔されずにやれるよ」
「貴様は奴の仲間じゃないのか」
「仲間？　違うよ、勝手にあっちが思ってるだけだって」
イザヤはアリーナに一夏くんの姿を見た。
「それじゃ、俺と遊ぼうか」
俺は『影』を刀にして近づいて斬りつけた。
「何をする！」
「仲間の力をしるのもいいじゃないか」
刀はＡＩＣによって止められた。
「やはり、こんなものか……なに！？」
ラウラは驚いた。なぜなら、刀はＡＩＣを通り抜け装甲に当たった。
「何をした」
「斬っただけだよ」

「ふん、貴様の実力は分かった。期待しているぞ、折原」
ラウラちゃんはピットに戻っていった。
「ラウラちゃんが帰ったし、どうしようかな？」
イザヤは地面に倒れている鈴を見下しながら呟いた。
「弱いものイジメは嫌いなんだよね。それに、負け犬には興味ないし」
イザヤもラウラの後を追うようにピットに戻った。

輝きたいかい（前書き）

投票をおねがいします。

輝きたいかい

今日は楽しい事があったし気分がいいな。
「それで、話は何かな？　シャルロットちゃん」
いつものようにシャワーを借りしてあげたら、話があると言われたよ、俺なにかしたかな？
「まずは、これを返します」
渡されたのはＵＳＢだった。
「それで、他にも聞きたいことがあるんだろ？」
シャルロットは頷き口を開いた。
「あなたは一体何がしたいんですか？」
「また聞くんだ。いいよ、話してあげるよ」
シャルロットは驚いた。
「俺が話すなんて意外かい？　それは侵害だな、俺だって普通な事だってするんだよ」
「よくそんなことが言えますすね」
「何でだい？」
「今日したことはあなたの仕組んだ事ですか？」
「いいや、最初から決まっていた事だよあれは、それに俺は負け犬には興味が無いしね」
「次にあなたはどこまで知ってるんですか」
「さぁ、俺にも予想が付かないな」
「最後に何で僕にあれを渡したんですか？」
「気分かな？　俺はさ三下の連中が自分の周りを嗅ぎ回るのが嫌いなだけだよ」
「本当にですか？」
「俺ってさ、嘘が苦手なんだよね。だから、いつも顔にでるんだよね」
「わかりました。話は以上です。」

「それじゃあ、楽しい学園生活を送ろうか」
出て行くシャルロットちゃんに俺は手を振った。
「人間はもっと、危機感を持った方がいいね」
イザヤは窓に寄り空を見上げた。
「君はこの空が好きかい？　俺は好きだね、暗闇は俺にあったものだからね。でも、君はあの星の様に輝きたいんだろ」
イザヤは一人しかいない部屋で真剣な顔をしながら話していた。

女の子って怖いね（前書き）

テストが始まり投稿できずすみません。
アンケートの方もよろしくです

女の子って怖いね

最初の対戦相手が最初から、一夏くんとシャルロットちゃんなんだよね。
「試合ラウラちゃんに任せて帰ろうかな？」
「なに言ってるんだよ」
一夏くんが寄ってきた。
「ハンデとして？」
「ハンデなんかいらねえよ」
「一回負けたのに？」
「あ、あれは！」
慌ててるな、よし！　もう少し弄ろう！
「攻撃も当たらないのに？」
「リーチの差がな……」
「燃費悪いのに？」
「……なにも言えない！」
試合前にこれは酷いな。
「それに」
言いかけたらシャルロットちゃんに邪魔された。
「僕のパートナーを駄目にしないでよ、イザヤは敵なんだから」
「助かった、シャルル」
「惜しかったな」
「何で、お前は一言多いんだよ！」
イザヤは笑いながら言った。
「そこに、一夏くんが居るから？」
その言葉を残し、イザヤはパートナーの元に行った。

「出て来い」
ラウラは静かにロッカーの方に目を向けた。

「バレちゃた？」
イザヤはナイフを右手に持ちながら現れた。
「お前の殺気は鋭いからすぐ分かる」
「詰まらないな」
「私は軍人だからな」
二人の会話は暗く静かに響いていた。
「調子はどうだい？」
「悪くはないな。本当に奴を消せるんだろうな？」
ラウラは睨みながらイザヤを見た。
「君の力があればできるよ。君の力は頼りにしてるよ」
「私、一人で勝てる」
「じゃ、俺は今回は見学かな？」
そして、ピットに行きデュラハンを展開しアリーナに降り立った。
「任せたよ、ラウラちゃん」
「ふん」
そして、試合が始まった。
なんとか、原作を崩しながらだが、ここまで来た。あと少しで折り返し地点だ。計画第2．5フェイズに移行される。
「さて、作戦を結構しようか」
デュラハンの『影』を薄くのばし、アリーナ全体に貼り付ける。
この時はまだ、物質化していないためダメージはない。
「これで、お終いだ！」
一夏がラウラに雪片弐型できりかかったがその剣はラウラには届かなかった。
「動いたら君たちの負けだ」
一夏達の周りには黒い線が囲んでいた　。
「チェックメイト」
「何をする！」
やられかけていたラウラはイザヤに怒った。
「負けて貰ったら困るから、手助け？」

「私には必要はない！」
「ＡＩＣが発動しないのに勝てるわけがないじゃないか。俺が助けなかったら負けていたんだよ」
「私が負けるはずが……」
「現実を見ようよ、ラウラちゃん」
「わ、私は、私は、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
ラウラは叫びだしＩＳに黒い何かが覆った。
「ＶＴシステムか、ブサイクな物をつけるなよ、ドイツ」
イザヤは誰にも聞こえない声で呟いていた。
「今日はなんて大変な日なんだろうな、これは俺の仕事でいいよな」
イザヤは『影』を刀にして、周りの線を解除した。
「あれは、千冬姉のだ！」
線が消えた瞬間、一夏は偽物に瞬時加速で近づこうとしたがイザヤに止められた。
「引っ込め、雑魚！」
興奮している一夏を蹴り飛ばし、偽物　を見た。
「借り物の姿で満足するのか！　お前は自分の力で強くなりたくないのか！　俺はお前の歪みをぶち壊してやるよ！」
その言葉は普段のイザヤの口からは出ない言葉だった。
「シャルロット、隅の方で待機していろ。戦闘にお前を巻き込まない自信は俺にはない」
シャルロットは一夏を連れアリーナの隅に行った。
『君は勝手だね、救えるのかい。君にあの子が救えるのかい。弱い君に』
「関係ねえ！」
『いつも、俺にまかせている君ができるわけ』
「関係ねえ。俺はあいつを助けるために表に立ったんだ。お前はあいつを見捨てたんだ。だから、俺があいつをあそこから引っ張り出すんだよ」
『勝手にしてくれよ』

他人から見たら一人で喋ってる様にしか見えないが、それは彼が二重人格のためだ。
「手を伸ばせばまだ助かるんだ！　だから、そんな借り物の姿を捨ててこっちに来やがれ！」
イザヤは刀を構え走った。
「行くぞ！」
偽物は上段から刀を下ろしたがイザヤはそれをよけた。
「まずは、その幻想をぶち壊す！！！」
イザヤは装甲を斬った。その切り口から、ラウラが出てきた。

――何故お前は強い。
「俺は強くないよ。俺は困ってるなら助けるだけさ」
――助ける。
「今の俺は誰でも助ける。手を伸ばせば」
――誰でも。
「今回はラウラを助けた。頼ってくれたらいつでも手を伸ばすよ」

イザヤは自室に戻り呟いた。
「今日は疲れた」
『なら、俺に代わるかい？』
「久しぶりに表に出たんだ。明日もこれでいくさ」
眠りについた。明日、地獄を見るとは知らずに。
「…………」
学校に着き速攻に寝ています。昨日大変だったんだよ。
「一夏ぁぁぁぁぁぁ！！」
五月蝿いな！

「五月蝿い」
起きあがった瞬間に見えた物は、シャルロットが女の格好をして、俺の胸ぐらをラウラが掴み引き寄せキスをされた。
「お前は私の嫁にする、これは決定事項だ！」
「って！！　嫁じゃなくて婿だ！　誰だよオタク知識を入れ込んだのは！」
俺は叫んだが次の瞬間。
「イザヤくん、誰とキスしたの！　あの約束を忘れたの」
教室にたっちゃんが入ってきた。
「あの約束？　聞かせて貰おうか」
箒はどこから日本刀をだしたの！
「へぇ、イザヤって女の子の前でキスするんだ」
なぜ、シャルルはパイルバンカーを構えているんだ。
「シャルルと箒は関係ないと思うのは俺だけか！！」
こうなったら、窓から逃げようと窓を開けると。
「どこに行くの？　イザヤ」
簪ちゃんがいた。
「俺って、今日しぬの？」
逃げたいよ。
「ねぇ、イザイザ」
のほほんさんが話しかけてきた。
「どうしたんだい」
「好きだよ～」
「俺も好きだよ」
ん、待てよ、この発言ってこの場にとったらＯｕｔじゃねえか！
「もう、煮るなり、焼くなりすきにしろ！」
次の瞬間、俺は意識はブラックアウトした。

二度ネタって面白い？（前書き）

投稿の途中結果

楯無さん４
簪ちゃん２
シャル１
マドカ１
束さん２
ちーちゃん４
のほほんさん２

まだ日にちもあるので投稿してください。この投稿でメインヒロインが決まるわけでないのでお願いします。

二度ネタって面白い？

朝、目が覚めてラウラちゃんが布団の中に居たり、箒がいきなり入ってきて竹刀でどつかれた。
「今日は町に行こうかな」
前日にシャルルに誘われたんだけど一夏くんに変わりを頼んだ。
「やっぱり、たくさん人がいるとこは楽しいな」
町を歩くイザヤは女性の目が注がれていた。
「俺ってそんなに目立ってるのか」
『気づけよ、お前の格好は夏物だが、冬物にしか見えないしね』
「そっちの方が目立っているのはいいかな」
町に出てからには何か楽しい事が無いと面白くない。
「男のくせになに威張ってるんだよ」
あんなとこで楽しい事をやっるじゃないか。
「イジメはかっこ悪いよ、よくないねぇ、実によくない」
「おっさんには関係ねえだろ！」
苛められていた男は臨也を見てビビった。
「そう、関係無い」
臨也はニコニコ笑いながら、三人の女子に向かって宣言した。
「関係無いから、君達がここで殴られようがのたれ死のうが関係のない事さ。俺が君達を殴っても　、俺が君達を刺しても、逆に君達がまだ18歳の俺をおっさんと呼ぼうが、君達と俺の関係は永遠だ。全ての人間は関係していると同時に無関係でもあるんだよ」
「はぁ？」
「人間って希薄だよね」
意味解らない事を言いながら、臨也は女達に一歩近づいた。
「まあ、俺に女の子を殴る趣味は無いけどさ」
次の瞬間――――臨也の右手の中には小柄なバッグが納められていた。

「あれ？　え？」
『二度ネタじゃないか？』
――気にしたら負けさ。
臨也はニコニコ笑いながら、そのバッグの中から携帯電話を取り出した。
「だから、女の子の携帯を踏み潰す事を新しい趣味にするよ」
そう言いながら、臨也は女の携帯電話を宙に解き放つ。カシャンという軽い音が響き、シールがベタベタと張られた携帯電話が転がった。
「あッ、てめ……」
女が慌てて拾おうと手を伸ばしたところで――
その指先を掠めるように、臨也の足が携帯に踏み下ろされた。
スナック菓子を噛み砕くような音が響き、割られたプラスチックの欠片が足の裏からはみ出した。「あぁーッ！」と叫ぶ女の悲鳴を気にしずに、そのまま何度も何度も右足を踏み下ろす。その動きはまるで機械のように、寸分たがわず同じ場所に足が踏み下ろされ続ける。そして、やはり機械のように、同じ調子の笑い声を漏らし続ける。
「アハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」
「ちょッ、こいつヤバイよ！　なんかキメてるよ絶対！」
「キモイよ！　早く逃げよう！」
女達はどこかに逃げていった。
「飽きちゃた。携帯を踏み潰す趣味はもう止めよう」
臨也が立ち去ろうとしたら、どこからかコンビニエンスストアにあるゴミ箱が飛んできて、臨也の身体に直撃した。
「がッ！？」
これはあの人の仕業かな。
「ち、ちーちゃん」
「いーざーやーくーん」
ゆっくりと影から出てきたのはちーちゃんとおどおどしている山

田先生だ。
「いきなり、何するんだいちーちゃん」
「校外でその呼び方を止めろと言っただろ、いーざーやーぁ。」
「俺は何もしてないけどな」
「なら、その落ちてる携帯はなんだ！」
『逃げるぞ！　今のちーちゃんには勝てない！』
――賛成だね、君に代わるよ。
『待て！！　お前は自分のご主人を売るのか！』
――君の方がちーちゃんの対処うまいじゃないか。
『関係ない！　俺はあの阿修羅の前にして逃げる気力がねぇよ……まて、デュラハンで壁を作り出して逃げる』
――それで行こう。
「ちーちゃん、今日も綺麗だね。惚れそうだよ」
「な、何を言っている／／／」
目を逸らした、チャンス。
「バイバイ」
黒い壁を作り出しダッシュで学園まで帰った。

臨海学校での楽しみ（前書き）

テスト中に書くのしんどいですね。
投票ラストまで、あと2日です。お願いしますね

臨海学校での楽しみ

臨海学校って何が楽しいのか全く解らないや。原作を知っている分ここはおとなしく傍観にてっしようと思ったんだよね。
「もう、着くのかい」
バスって疲れるよね。
隣にいるのほほんさんは凄くはしゃいでいます。
「イザイザ、自由時間一緒にビーチボールしよう」
「ビーチに行けたらやろうか」
行く前にウサギちゃんに捕まると思うけど。
そんなやりとりをしていると旅館に到着した。
(今回の臨海学校は楽しみが多いな。これが終われば第3フェイズに移行だ)
「あら、こちらが噂の……?」
旅館の女将だろう、挨拶は大事だね。
「ええ・・・まぁ。今年は二人男子がいるせいで浴場分けが難しくなってしまって申し訳ありません」
ちーちゃんは真面目なんだから面白くない。
「初めまして、折原臨也です。迷惑があるかもしれませんがよろしくお願いします」
年上に挨拶するのはよくある事だけど敬語は疲れるよ。
「まあ、ご丁寧にどうも。短い期間ですが楽しんでください」
さて、挨拶も終わった事だし少し歩こうかな。
「どこに行くつもりだ。いざや」
ちーちゃんに肩を掴まれて動けなくなった。
「近くの森に森林浴しに行くだけだよ」
「ほぉ、お前が森林浴か。その前に荷物を部屋に持って行け」
俺は持っているバッグを一夏くんに投げた。
「頼んだよ、一夏くん」

「おい、なんでだよ」
バッグをキャッチした一夏くんは文句を言ってきた。
「海より森が好きだから？」
「何で疑問系なんだよ」
「頼むよ」
そのまま、林の中に行った。
「海の匂いは嫌いだから林はいいね。それに、衛星からの監視が緩くなるしね」
ＩＳ学園に入ってから衛星からの監視をずっとされていた。夜は別だけど。
「後は携帯の電波がいい所はどこかな？」
臨海学校は携帯の持ち込みを禁止されていて、周りには通信用の電波塔が少ない。
「あった、あった。これで、連絡がとれる」
携帯に番号を打ち込み電話をした。
『どちら様だ』
携帯からおっさんの声が聞こえた。
「この前、依頼した奈倉です」
奈倉はただ思いついた偽名だ。
『無人密漁船なんか、何に使うんだ？』
「その話なんですが、船の中に人を何人か乗せることはできますか」
『別料金が発生するがいいか』
「なら、２００万でいかがでしょう」
『解った。明日でいいんだよな』
「そうです。お願いしますね」
携帯をしまい、後ろを振り返り名を呼んだ。
「束ちゃん隠れてないで出てきたら？」
木の後ろから束ちゃんが出てきた。
「久しぶりだね。イザ君」
「久しぶりだね。それであれは完成したかい？」

「イザ君の専用のバリアー無効化搭載の第五世代かな」
「それだよ」
「君じゃ、使いこなせないよ」
「使うのは俺だけど、俺じゃない」
「なら、これを渡しておくね」
渡されたのは漆黒の指輪だった。
「ありがたく受け取るよ」
指輪を左手薬指にはめた。
「やった〜！　これで、イザ君と結婚できる〜！」
「結婚はできないがお礼をするから何がいい？」
「そ、それじゃ！　キスをして／／／／」
赤くなった束ちゃんは新鮮だね。
「なら、目を瞑ってくれないかな？」
束ちゃんは頷きゆっくりと目を閉じた。
「頑張ったご褒美だよ」
キスをした、勿論続きは……読んでいるあなた方にお任せします。
「それじゃ、明日も楽しみにしとくよ」
「う、うん／／／／」
旅館に戻り夜まで昼寝を楽しんだ。

女子会（前書き）

臨海学校の夜を書きましたよ、ニヤニヤ
投票は明日がラストです。

女子会

臨海学校初日夜

織斑姉弟の部屋に数人の生徒が集められていた。端から、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、凰鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒ、更識簪、布仏本音の女性が集められていた。

千冬は片手に缶ビールを持ちながら言った。

「お前等はアイツ等のどこがいいんだ」

その一言で凍りついた部屋が熱くなった。

「まずは、一夏の事だ」

先に口を開いたのは箒だった。

「私は弱くなったアイツを鍛えてるだけです」

続いて鈴が顔赤くして口を開いた。

「お、幼馴染みとして／／／」

セシリアはいつもの口調で呟いた。

「私はクラス代表として頑張って欲しいと……」

「そうか、そのまま伝えといてやろう」

千冬はにやけながら言った。

「「伝えなくていいです！」」

千冬は目線を箒に移した。

鈴とセシリアが声を揃えた。

「次は、臨也のことだな」

千冬は目線を箒に移した。

「不思議な魅力に惚れました」

シャルロットは

「困っている時に助けてくれたところです」

ラウラは

「手を差し出してくれたことです」

「あれは私でも予想外だった」

千冬は缶ビールを傾けながら次に簪に目線を移した。

「わ、私を必要にされた事が嬉しくて」
　のほほんさんは
「そうだね〜イザイザは本当の自分を隠していて本質では余り人に関わりたくなくてそんな所が好きなのです♪」
「布仏は臨也の深い所まで触れているな。なぜ、そこまで知ることができた？」
　千冬は不思議そうに聞いてみた。
「週に一回相談されるからです〜」
　全員が驚いた、相談をするほど困った素振りしないのを見ているため余り信用できなかった。
　千冬は飲んでいたビールを吹いた。
「教官はイザヤのどこに惚れたのですか」
「な、何をきいている」
　慌て出す千冬を見て全員の視線は千冬に向かった。
「そ、それはだな」
　その時、襖が開いた。
　臨也が現れた。
「温泉は最高だね」
「皆さんお揃いで何を話していたんですか？」
　臨也はにやけながら言った。
「い、いや。私達はなにも」
「そ、そうだよ」
「何だ詰まらないなー、てっきり恋の話をしてると思ったのにざんねーん」
　臨也のその顔は全てを知っている顔だった。
「折原、その指輪はどうした」
　千冬はいつもの教師の態度に変わっていた。
「これは、ある人からの贈り物だよ」
「なぜ、左手の薬指に着けている」
「ちーちゃんもしかして嫉妬かい？　それは違うよこれはただの遊

びにいるものだから」

「教師をからかうな、いざや！！」

千冬が臨也を追いかけるために退室したため女子会はこれにてお開きになり、臨也を狙う女子はのほほんさんが最も近いと思った。

生きることは一番辛いんだよ（前書き）

結果報告します！　番外編第一弾のヒロインはちーちゃんに決定しました。また、２０万ＰＶに達成しましたら第二弾のアンケートを取りますので、今回投票してくれた方、されていない方も次回もお願いします。

生きることは一番辛いんだよ

今日はＩＳのパッケージの何かをするんだけど、詰まらないから旅館の上から皆の行動を観察してますよ。
「新しいＩＳの性能はどんな物か確かめようか」
俺が見ている先は箒ちゃんが赤椿を纏っている所だった。
「うーん、さすが束ちゃんだね。これならコイツの力も期待できるな」
俺は指輪を見ながら呟いた。
「それじゃ、俺もＩＳを展開しようかな」
俺はＩＳを展開してみた。
「さすが火力特化！　それにしてもターンXに似てないか？」
似ていないとこはワイヤークローが付いてないし、他にスナイパーライフルが予備武装で入ってるけどな……ＩＳで月光蝶は使えるのかな？
「使ったらヤバいな」
デュラハンの方に通信が入った。
『今すぐ会議室に来い』
ちーちゃんからの通信はそのまま切れた。
「面倒だから……こっそり入ろう」
会議室の前に着いた時なにか嫌な感じがし入るのを止めた。
「作戦なんか勝手にやってくれよ、俺は密かに暗躍するのが楽しみなのに」
俺のデュラハンからもう一機のＩＳの反応をキャッチした。その内容は『お前の計画を邪魔する転生者が現れた』
「俺と同じ存在が居るなんて反吐が出るほど殺したいな。どこに居るのかな」
ディスプレイを弄り検索してみたところ、こちらに接近していた。
「ステルス機能まであるなんてとことん殺したくなるよ。それにし

ても、俺の計画は誰から漏れたんだろう？　一回洗って、邪魔な奴らは消そうか」

臨也の顔はとっても楽しい物を見たように喜んだ顔をだった。

「さて、『ターンX』の力を試させてもらおうか」

臨也はそのまま外に向かって歩いて行った。

生きることは一番辛いんだよ（後書き）

お知らせです。実は今月の終わりまでに文化祭に文芸部で出す小説が出来てないので投稿が遅く内容が薄くなりますがこれからも読んでください。

「さて、どこに居るのかな？　早く見つけて削除しないと」
ターンXを纏い探している。なんで、デュラハンじゃないかって、それはデュラハンにはブースターが付いていないから飛べないんだよ。
「もしかして、あそこに浮かんでいる『エクシア』がターゲットか一撃で仕留める」
このターンXは飛んでも音が出ない、相手に見つからないので簡単に接近できる。
「シャイニングフィンガーとは、こうゆうものだ！」
左手からビーム状物質を発生させ牽制し動けない相手の近くまで行き右手で相手を掴み。
「このターンX凄いよ！　さすが∀のお兄さん！」
相手を左手に落とし留めをさす。
「こ、ここまでか！」
「君は俺を怒らせたからこれだけじゃすまないよ」
「止めろよ、俺のエネルギーはないんだぞ」
「関係ないよ」
にやけながらながら後ろのパッケージを開き叫んだ。
「月光蝶！」
その瞬間後ろから青色のナノマシンが出てきた。
「ここだけ∀かよ！」
そのまま、相手の体はのころなかった。
「俺の計画を邪魔しないでくれよ。本当に邪魔にしかならないよ」
その間に一夏くんが撃墜された時間になってしまった。
「さて、作戦も終わったしゴミ掃除でもしようかな？」
臨也は福音が去った後の戦場に来た。
「いたいた。それじゃ、お勤めご苦労様」

臨也はスナイパーライフルでエンジンを撃ち抜いた。
「証拠隠滅。作戦をこのまま継続させよう」
臨也は笑いながら宿舎の影に降りた。
「さて、明日まで休もうかな。それとも、今のうちに一夏くんを抹殺しようかな」
のほほんさんが物置から出てきた。
「それは出来ないよ。いっちーの部屋には教師が何人かいるよ」
「それはどうもありがとう」
「どういたしまして」
「それじゃ、今回の事件が終わるまで俺の部屋に来るかい？」
「それもいいけど～今回の事件の結末を知りたいな」
「部屋にモニターもあるからきなよ」
「分かった～」
そのまま部屋に戻り結末を最後まで見た。
「それにしても、詰まらないな。さて、次の一手が楽しみだよ」

夏休みは暗躍のし放題

ＩＳ学園の夏休みになり、俺は池袋に帰ってきた。
「学校が始まるまで色んな事が出来るな」
その矢先に部屋のインターホンが鳴った。
「こんな時に誰だい」
俺はインターホンのカメラを見たら意外なメンバーがいた。
『ヤッホー遊びに来たよイザヤくん』
ＩＳ学園の生徒会メンバーだった。
「どうしたんですか？」
『学園に居たら暇だから遊びに来たよ』
「分かりました、入ってきてください」
ドアのロックを解除し中に入れた。
「急に来ないでくださいよ。準備ができませんよ」
生徒会メンバーは部屋の書類の数に驚いていた。
「もしかしてこれ全部あなたが調べたの？」
たっちゃんは書類いの数に驚きふざけたことをしていなかった。
「当たり前じゃないですか。そろそろ、お昼ですけどどこかに行きませんか」
「そ、そうね」
まだ、驚きの様だった。
「さて行きましょうか。今回は全部俺が持ちますよ」
「お〜イザイザ優しい〜」
部屋をで目指したところはロシア寿司に行った。
「やぁ、サイモン久ぶりだね」
「オー、イザヤ久シブリ」
黒人のロシア人が出てきた。
「それじゃ、奥の部屋で良いかな」
奥の方から声がしてきた。

「お、折原じゃねえか。いつ帰ってきたんだよ」
声をかけてきたのはニット帽をかぶった男だった。
「久しぶりだね。ドタチン」
「お前は変わんないな」
「ＩＳ学園に行って変わったと思ったかい」
「思わないな」
ドタチンは笑いながら返した。
「お腹も減ったし早く食べないか？」
「その前に後ろの連中を紹介しろよ。お前の連れだろ」
「後ろの皆は生徒会のメンバーだよ」
その後は皆で寿司を食べ、何だか知らないが生徒会メンバーは俺の部屋に泊まった。
「こ、これは何なの」
その夜、楯無は見てはいけないものを見ていた。
「それを見てしまったんだね」
「イザヤくんこれは何なの」
その紙には『織斑一夏殺害計画』と書かれていた。
「その紙の通りだけど？」
「生徒会長として見逃せないわよ」
「ふふ、君がそれを見てただで帰れると思っているのかい？」
臨也は一歩一歩楯無に近づいて行った。
「実は俺って催眠術が得意なんだよね」
その瞬間、楯無は床に倒れた。
「コレを見られるとは全く思わなかったよ。しょうがない早めに計画を進めよう」
もう一つ臨也の手に握られている紙には『亡国機業――――計画』と書かれていた。
「さて、ここからは俺の出番なわけよ」
臨也は夜の池袋を見下ろしながら呟いた。

暗躍その２（前書き）

体育祭の準備で休みが無いです（泣）

暗躍その2

生徒会メンバーが帰った後、俺はある場所に来ている。
「時間どうりに来てるじゃないか、自称魔法少女ちゃん」
そこに居るのはちーちゃんを若くした女の子がいた。
「誰が自称魔法少女だ！　私は織斑マドカだ、いい加減覚えろ」
「えーただのスキンシップじゃないか」
「それが、いらないんだ」
今さらだけど、場所は俺の事務所なんだよ。
「さて、君のＩＳをイギリスに採りに行こうか」
「その件だ早く行くぞ」
はぁ、何で君はそんなとげとげしてるのかな。
「えっと、確かここに束ちゃんがくれた音速で飛ぶ小型飛行機が……あった、あった」
取り出したのは小さな飛行機の模型だった。
「ふざけているのか」
マドカは呆れながら言った。
「それは、見てから言ってよ」
臨也は模型についている小さなボタンを押し床に置いた瞬間、模型は大きくなった。
「あの女は意味が分からないものばかり作るな」
「まぁ良いじゃないか、それより早く行くよ」
俺は戦闘機の後部座席に座った。
「なぜ、お前が後ろなんだ」
「だって、俺が潜入して取るんだから普通は後ろだろ」
「分かった、早く行くぞ」
「いや、君が遅いんじゃないか」
俺がニコニコしながら言ったら、銃弾が真横をかすって行った。
「余り私をおちょくるなよ」

額に青筋を作りながら言った。
「ほら、早く行くよ。時間があまりないんだから」
「お前がＩＳ学園に行くからだろ」
「まずは、敵の懐に忍び込んで戦力を調べるのが当たり前じゃないか」
「くっ、お前のくせに」
「余り起こると可愛い顔が台無しだぜ」
キリ！　なんとなくここでカッコイイ事を言っておいた。
「か、可愛いだと／／／」
あれ、意外に効いてるのかな？
マドカは操縦席に座りながら言った。
「そうか、そうか。なら、早く行って仕事を早く終わらせるぞ」
「そうすればお前との時間も作れるからな」ボソッ
なんだか、さっきから独り言が激しいな。
「それじゃ、イギリスに潜入しようか」
戦闘機はイギリスに向け飛び立った。
「思ったがこれにはステルスは入っているのか？」
「当たり前だろ、それじゃないと俺が戦うはめになるし」

ＰＶ１０万記念！！（前書き）

時間が出来たので書けました

ＰＶ１０万記念！！

時は遡り夏休み初日。
「生徒会の仕事が無いし、ちーちゃんでも弄ろうかな」
そう言って臨也は職員室に向かった。
「で、デートだと」
「そう、デートしよっか」
なぜこんな展開になったかと言うと、それは５分前の事だった。
「遊びに来たよ、ちーちゃん」
「ここは遊びに来るとこじゃない！」
そう言って千冬は臨也目掛け主席簿を投げた。
「そんなことしたらいつか死人が出るんじゃないかな？」
臨也は軽々と主席簿を避け文句を言った。
「その死人がお前だったらいいがな」
「それは酷いな？　俺は良い事を言いに来たのに」
「良い事だと」
千冬は警戒した。
「明日、デートしない」
「今何と言った」
「デートしない？」
「で、デートだと」
千冬は顔を赤くしながら言った。
「そう、デートしよっか。明日学校の門の前で待ってるから、バイ」
そう言って、臨也は部屋に戻って行った。

翌日

「時間言ってなかったけどいいよね」
そう言いながら臨也は門の前に行ったら、スーツ姿のちーちゃん

がいた。
「えーいつもの格好か、期待していたのに」
「何に期待してるんだ」
「ちーちゃんがフリフリのワンピースを着てくると思ったから」
その瞬間臨也の頭に千冬の手刀が叩き込まれた。
「痛いよ、ちーちゃん」
臨也は頭を押さえながら訴えた。
「大人をからかうからだ」
「からかってないよ。ただのスキンシップじゃないか」
「お前のはからかってるんだ」
「ちーちゃんは冗談が通じないんだから」
「本当にお前は人を怒らせるプロだな」
「もしかしてこれぐらいでキレたの？」
「いい加減しろー」
千冬は近くにあった標識を引っこ抜いた。
「それはシャレにならないよ。本当に死人が出るかもね」
「その死人はお前だ！」
ちーちゃんはそのまま標識を振り回しながら追いかけてくる。
「ほらほら、どこを狙ってるのかな」
標識は臨也の真横や真上を通過していく。
「当たらんか、そしてシネェエエ！」
「駄目だよそんなんじゃ、俺には当たらないな」
いやー普段銃撃を避けることが多かったせいか苦じゃないな。
「なら、これならどうだ！」
ちーちゃんが持ち上げたのは2ｔトラックだった。
「それはもう、犯罪だから」
いや、最初から犯罪行為しかしてないから。
「これなら当たるだろ」
大型トラックが飛んできてそのまま。
「それこそ当たらない、落下速度があっても浮いてる時間が長いの

はアウトだね」
そのやり取りが夕方まで続いた。
「いやー今日は楽しかったよ、ちーちゃん」
「私は余計に疲れたよ」
「まぁ、今日みたいな楽しい時間を忘れないようにしなよ」
「どうゆうことだ？」
「そのうち分かるよ」
臨也はニコリと笑って部屋に戻った。

暗躍その３（前書き）

体育祭の練習で体力が底をつきました。
くそぉ、なんで体育祭なんてあるんだよ。

暗躍その3

「起きろ、研究所上空についたぞ」
起きて見ると本当に下に研究所があった。
「じゃ、そのまま突撃して」
「………」
臨也の発言で機内は一瞬静かになった。
「何言ってるんだ！　私は自殺しに来たんじゃないぞ」
マドカは臨也の発言に反発した。
「大丈夫、突撃しただけじゃ壊れないから。それに帰りはオータムが拾ってくれるし」
「なら、こらはどうするんだ」
「爆破するに決まってるだろ、研究所じたいね」
臨也は微笑みながら言った。
「分かった、衝撃に備えろよ」
戦闘機は研究所に急降下し突撃した。
「ターンX展開」
臨也は研究所に着いた途端ターンXを展開した。
「マドカちゃんは俺の後ろからついて来て、今回は迅速に終わらせるから」
「お前は仕事になると真剣になるから日頃からその態度でいとけ」
「それは無理だし、無駄口をたたいてる場合じゃないね」
すでに周りには武装した人間が集まってきた。
「なっ、ＩＳだと！　勝ち目がない」
「さて、ショータイムだ」
情報通りに研究所に居るのは普通の人間だけだった。
臨也は一瞬にして周りを血の海に変えた。
「目当てのものはこの奥か」
「本当だろうな」

「ここだ、シャイングフィンガー」
臨也は扉に左手をかざし扉を溶かした。
「本当にあるとわな」
「これじゃまるで俺達に使ってくれと言ってるみたいだね」
マドカはサイレント・ゼフィルスを纏い離脱する準備を整えていた。
「それじゃ、ここに向かって飛んでね。俺は別のルートから帰るから」
臨也はサイレント・ゼフィルスに脱出のルート地図を送った。
「了解、今回は」
そこで臨也は遮った。
「それはまだ言ったら駄目だよ、死亡フラグ」
そのまま臨也は別ルートから離脱する前に研究所のデータを根こそぎ奪ってから外に出た。
「それではみなさん、ご唱和ください――――Ｉｔ'ｓ　Ａｌｌ　Ｆｉｃｔｉｏｎ！！」
はぁ、これで楽しい事が増えたな。
「帰って情報を整理して解析しようか、■■■について」
臨也は後から来た戦闘機に乗り込み池袋に帰宅した。
「これはこれでまた仕事が増えるな」
臨也は池袋に着く前に情報を整理し計画の進行度を計算していた。
「年明けまでにはどうにかなるな。これで俺の計画は遂行される」
その声は暗闇の池袋に静かに響いた。

夏休みの終了のお知らせ（前書き）

皆さんのおかげでＰＶ２０万アクセスいきました！　そこでまたアンケートを取りますよ。

楯無さん
ちーちゃん
簪ちゃん
束さん
ラウラ
マドカ
のほほんさん

の中から投票してください期限は１０月末までです。

夏休みの終了のお知らせ

研究所を爆破しＩＳ学園に帰ってきました。
「この門を見るのも久しぶりだな」
久々に見る門を見ていると声を掛けられた。
「何していたいーざーや」
後ろに怖い鬼がいた。
「夏休みを満喫していたんだよ」
だって今日が始業式だったはずだから。
「教室に行きますね」
「始業式は昨日だ！　お前は無断欠席してどこにいた！」
「いや、その前に職員室で質問タイムといこうか」
ちーちゃんの後ろには鬼の姿が映っていた。
えっと、行って帰ってきても……大丈夫じゃなかった。
「それは困るよ、早く教室に行かないといろいろ大変なことになりそうだから」
何だか嫌なことになりそうだから。
「それもそうだな行って来い」
すんなりといかせてくれたちーちゃんなんだか顔が引き攣っていた。

一組では学園祭の出し物を決めていた。
「ここはやっぱり。織斑君と折原君のホストクラブでしょ」
なんでこうなってるんだよ。確かにこの学園には俺と臨也しかいないけどこれは酷過ぎないか。
「ここは織斑君と折原君とツイスターでしょ」
「ちがう！　ここは織斑君ち折原君とポッキーゲーム」
「それ、先生も賛成です」
なんだと！　先生までもが参加してるぞ！　こうなったら誰も止

められないのか。俺は周りを見渡したが箒は参加してる、セシリアも同じく、シャルは赤くなりながらも参加、ラウラは何かを閃いた様だ。
「なら、コスプレ喫茶にしないか」
「「「「それだぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」」」」
クラスの女子は全員が賛成した。
「遅れてごめんね」
その声とともに現れたのは臨也だった。
「なるほど、コスプレ喫茶か。また当分休もうかな」
その言葉でラウラが立ち上がった。
「嫁は私の意見に賛成じゃないのか？」
「賛成で良いや」
即答かよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！
「そうか、そうか嫁は私の意見がいいのか」
なんでその言葉で箒とシャルは怖い顔をするんだよ。
「この中じゃコレが一番ましで簡単だしね。俺は厨房するから」
「「「「それは反則！」」」」
またしてもクラス全員が叫んだ。
「駄目だよ、折原くんもホールじゃないとお客さんがあまり来ないよ」
「男のお客さんも少ないし、女性のお客さんは男の子を求めてるんだよ」
その言葉にまた山田先生が頷いた。
「しょうがない、俺も全力で参加するよ」
その言葉とともに学園祭の出し物が決まってしまった。

生徒会（前書き）

投票は感想にお願いします

学園祭の出し物が決まって生徒会室に来ています。
「凄い山ですね」
俺の机の上のは部活の部費に関する資料が積まれていた。
「ごめんなさい、お嬢様はイザヤくんに任せると言ってしまったので」
虚さんは謝りながら作業をしていた。
「これぐらいあると面白いですから良いですよ」
紙を見ていくと面白い事しか来てなかった。テニス部『天衣無縫の極みが欲しいです』テニスを楽しんで下さい、却下。次は調理部『チェーンソー』何を斬るんですか、却下。次は新大陸発見部『シナプスに行きたい』勝手に行ってください、却下。ＳＯこれ以上はアウト、却下。非公式新聞部、それは俺だけだから却下。剣道部『若き頃の千冬様』本人の前で言ってください、採用。バスケ部『翼が欲しいです』諦めたらそこで、試合終了です。却下。まともなものが無いな……ＢＬ部、悪寒がするので却下。
「この学校ってまともな部活が無いですね」
俺が話しかけると虚さんは呆れながら言った。
「この学校は変人が多いですからね」
その発言はこの学園の８割の人を指していますね。
「本当ですね」
「その中に折原さんも入っていますよ」
当たり前じゃないか、変人こそ最強なんだよ。
「否定しないんですね」
「自分でも思ってる事ですから」
その発言で虚さんはため息を吐いた。
「それにしても会長来ないですね」
「お嬢様なら織斑さんを誘拐しに行きました」

ここでまさかの犯罪発言！
「あの会長は何でもありですか？」
「その質問は折原さんにも返します」
「俺はごく一般な生徒Aですよ」
「ごく一般な人は織斑先生に追いかけられません」
失礼だな。
「僕は何も悪くない僕は被害者だよ」
本当にいつも俺は悪く無いのにね。
「さて、書類も片付いたから帰るよ」
本当に全部見たんだよ。片付いたんだぜ。

傍観者の暇つぶし（前書き）

体育祭が中止になり月曜に延期とかないでしょ〜

傍観者の暇つぶし

一夏くんの練習を見ている折原臨也で〜す。今日は生徒会の仕事が終わったので傍観することに決めました。
「それにしても、素晴らしく弱いな」
雪羅になってから燃費が悪くなりとってても弱くなっているよ。
「何やってるのイザイザ〜」
練習を見ていると後ろからのほほんさんが登場した。
「やぁ、今ね一夏くんの練習を見ているんだよ」
「面白い？」
のほほんさんはいつもの調子で聞いてくる。
「あまり楽しくないな、これなら今からでも死んで欲しいくらいだよ」
いつものように答えた。
「それなら、倒したらい〜じゃん」
「俺はジャンプが好きだから、少年誌みたいに特訓するのを見て笑うのが好きなんだよ」
「それって好きに入るの？」
「だって、勝てない相手に特訓して勝てるのが少年誌だけど、それは現実を見てないからできる行為なんだよ。だから彼らがやってる事は一種の現実逃避みたいなものさ」
臨也は練習風景を面白そうに見ながら話した。
「だから、今度の学園祭で痛い目を見てもらおうかなって思ったんだ。面白くなりそうだと思わないかい」
「いいね〜それ、私も見てみたいな〜」
のほほんさんはそれでもいつものように答える。
「それじゃ〜敵さんはとっても強いの？」
「そこは見てからの秘密っていいたいけど、俺はそんなの嫌いだから言ってあげるよ」

「わ〜い」
「敵さんは強いよ、油断だんさえしなければね」
臨也は平然と秘密を喋っている。
「さて、彼の仲間を何人かこちらに引きずり込めないかな」
「そうだね〜一、二人ぐらいなら居るんじゃない」
「例えば？」
臨也は珍しく他人の答えを聞いてみた。
「ラウラちゃんとシャルちゃんかな？」
「あの二人か、ラウラは分かるがなんでシャルなんだ？」
「シャルちゃんはイザイザに恋をしてるんで〜す」
「知らなかった」
その臨也の顔は驚いていた。
「それなら、二人にお話しをしに行こうかな」
今日は取りあえずここに居ないラウラのところに行こうかな。

闇への誘い（前書き）

投票お願いします

俺は自分の部屋にラウラちゃんを呼び出した。
「話って何だ？」
ラウラは真剣な顔をしながら臨也を見る。
「君はまだ、一夏くんを嫌っているかい？」
「まだ、納得がいかない」
この回答は予想が出来た。なぜなら福音事件の際、ラウラちゃんは座標を教えただけで現場には向かっていないからだ。
「その解答だけで嬉しいよ」
臨也は喜びながら麦茶を飲んだ。
「何か、事を起こすのか」
「さすが軍人さん、勘が良くて助かるよ」
やっぱりこの子はこちら側に居てくれるのが良いな。
「この前のようなことをするのか」
「話してもいいけど、ラウラちゃんは作戦に参加してくれる？」
「嫁のする事には従う」
これは最高のエンディングにいけそうだよ。
「これから話すことは俺達二人だけの秘密だよ」
「了解した」
「なら、話そう。俺がする一大イベントを全て」
俺が話している間何も聞かずにすべてを理解してくれた、これからの事を全て。
「どうかな、面白そうだろ」
臨也はニコリと笑いながら手を伸ばした。
「私もその作戦に乗ろう、軍人として契約した人間との仕事は最後までやり通す」
ラウラも臨也の手をとり計画に参加した。
「それじゃ、明日はシャルルちゃんのとこに行こうかな」

「それは無理だろ」
「何故だい？」
「シャルルは嫁に惚れているがそんな事はしないはずだぞ」
「それなら、脅せばいい話じゃないか。そっちの方が俺らしいしね」
情報の操作をすれば三日以内にこちらの手に落ちるだろう。
「ラウラちゃんは俺からの連絡があるまでは学園祭では待機して欲しいな」
「了解した」
この間にも俺の計画は進んでいく、ここからは原作を無視した話を展開して行こうじゃないか。
「嫁よ本当にそんなことが可能なのか」
「可能じゃなくて、可能にするんだよ。俺の手で」
そう言って臨也は持っていたグラスを落とした

ラウラちゃんを誘うことに成功し今日もアリーナの特訓を見に来た。

「ラウラちゃん、何であんな練習するか分かるかい？」

臨也は後ろにいるラウラに問題を出してみた。

「射撃可能な武器があるからですか」

ラウラは普通に答えた。

「正解。でも、あんなことをしても足しにはならないだろうけどね」

「それはなぜですか？」

ラウラの口調は軍人が上官に質問をする態度変わっている。

「一夏くんには射撃の才能が全くないからだよ。君も知ってるだろ一夏くんＩＳが白式の時の武器だったもの」

「雪片弐型でしたよね」

「そう、そして新しい武装の雪羅はシールド、クロウ、カノンのモードがあるけど一夏くんの場合はカノンのモードを使いこなしていない。一夏くんが得意なのは近接格闘なんだよだからこの特訓は相手の零距離からカノンを撃ちこむための特訓だろ」

「戦う場合なら私はどうすればよいですか」

ラウラちゃんは戦う気満々だが彼女では簡単に一夏くんを倒すから面白くないし（まぁ、彼になら誰でも勝てると思うんだけどね）

「そうだね、距離をとりながら射撃で攻めて近づいて来たら無理しずに退くことだね」

オウタムはどれだけいけるのかな？　本人は良い物が手に入ったて言ってたけど。

「それより、ラウラちゃんその話し方やめてくれない何か俺が悪役みたいでいやなんだけど」

本当に俺は悪役ではなく裏ボス的な存在なんだけどな。

「いえ、あなたと自分は雇い主と兵の関係なんですから」

「なら、俺達二人の時だけでその喋り方で良いかな？」
「それなら了解した」
そっちは良いんですか。
「それじゃ、俺は資料をまとめるからこれで戻るけどラウラちゃんは一夏くんの成長を教えてくれないかな」
「了解した」
本当に忙しいよね学園祭の時の騒ぎの隠ぺいするための裏工作、今からやって間に合うかな？　間に合うと思うけどね。

学園祭その一（前書き）

真剣恋をアマゾンで予約してやったぜ！
まぁ、皆さんは俺みたいに年齢を守ってゲームをしてください。

学園祭その一

学園祭になり俺は喫茶店で着替えていた。
「イザヤ、本当にそれを着るのか」
一夏くんは心配そうに話しかけてきた。
「コレを着ないと学園祭は始まらないしね」
「俺はこの服で良かったけど、お前がそんなのを持ってくるとは思はなかったぜ」
男二人は小さな部屋で着替えている。
「カツラ（・・）をかぶれば出来上がり。それじゃ、先に行くよ」
部屋から出てきたのは黒髪ロン毛のメイドさんだった。
「本当にあれで行くんだな」
部屋で着替えている一夏は呟いた。

その頃、教室では女子の会話が盛り上がっていた。
「織斑君の執事服姿ってどんなんだろうね」
「折原君の方も気になるよね」
女子たちの会話は二人に事で盛り上がっているがこの盛り上がりが続くことはなかった。
「すみませ〜ん遅れました」
ドアが開き美少女が入ってきた。
「どなたですか？」
一人の女子が美少女に話しかけた。
「私は甘楽ちゃんと言います」
美少女は綺麗なお辞儀をした。
「こんな人居たっけ？」
一人の女子が叫んだ。
「メイド服の予備が一個足りないんですが」
その瞬間、女子全員が甘楽ちゃんを見た。

「もしかして折原君？」
一人の女子が呟いた。
「せ〜かい！」
全員が声にもならない衝撃を受けた。
「男に負けた」
「キレイすぎる」
「化粧が上手すぎる」
「全てにおいて負けている」
その時、臨也は何かを思いついたのかゆっくりと口を開いた。
「大丈夫ですか？　名も無き皆さん」
その一言で全員の心を折った。
「どうしたんですか？　男に負けた皆さん」
どんどん女子たちは乙状態になっていった。
「気分が悪いなら帰って下さい。男に負けた名も無き皆さん」
一夏が来るまで女子たちは床に乙状態になっていた。

学園祭その２！

「楽しかったな♪」
臨也は椅子に座りながらウキウキしていた。
「いや、皆の心折るのはやめろよ。時間がかかるんだよ」
教室に居る女子の半分は元に戻ったが中には教室の隅で暗くなっているのがまだいる。
「だって、楽しいんだよね♪」
「そろそろ開店なんだぞ」
「俺が楽しめればそれでいい」
「それって酷くないか」
一夏は呆れていた。
「しょうがないな」
臨也は椅子から立ち上がった。
「我々は一人の英雄を失った……違った」
「ギレンの演説かよ！」
一夏くんは知らないと思っていたのにな。
「ロボットは男の魂だぜ」
心の声まで聞こえるのか。
「もし、今日！　売り上げが良かったら一夏くんが何かしてくれるよ」
その言葉で女子は復活した。女子って怖いないろいろと。
「何で俺なんだよ！」
「面白いから？」
顔を傾けながら言った。
「可愛く言っても、お前男だから！」
その言葉で臨也は調子に乗った。
「そんな、私との関係はそんなものだったの」
臨也は両手で胸を押さえ目をうるうるさせた。

「織斑君ひどいよ、甘楽ちゃん大丈夫」
一人の女子が臨也の背中をさすった。
「そいつは甘楽じゃなくてイザヤだから」
「今の折原君は甘楽ちゃんなんだよ」
その女子の目はキラキラと輝いていた。
「ふっ」
臨也は小さく笑った。
「今、笑っただろ」
「酷いよ、織斑君は私が嫌いなの？」
涙を出した臨也に女子が集まり一夏を責めていた。
「織斑君は女の子を苛めるのが好きなの」
「女の子敵よ」
「天然一級フラグ建築士」
「鈍感」
この後も一夏は責められ続けた。

学園祭その３（前書き）

織斑一夏はログアウトしました。

学園祭その3

「メイドさんにご奉仕セット一つ」
俺はただ今、女装して働いています。
「お嬢様お待たせしました」
「き、キレイ」
「そ、そんなお嬢様の方がお綺麗ですよ」
少し頬を赤くして言ってみたら、お客様は「はぅ～」と言ってショートしていた。
「甘楽ちゃん、休憩してください」
「はぁ～い」
休憩室に行き、執事服に着替えた。
「さて、ここからがお楽しみだよ」
臨也は接客に出た。
「お帰りなさいませ、お嬢様」
臨也はニヒルに笑いかけた。
「ふ、二人です」
「ご案内します」
『『『折原君は接客が上手すぎる。織斑君なんて緊張しているのに』』』
その視線の先には戸惑っている一夏がいた。
「お嬢様、こちらにお掛け下さい」
臨也はなれた手つきで椅子を引き座りやすくしていた。
「は、はい／／／」
女性は真っ赤になりながら返事をした。
「こちらはメニューになります。お決まりになりましたらこちらのベルを鳴らしてください」
臨也はテーブルにガラスのベルを置き他のテーブルに行った。
「お嬢様、お決まりですか」

「執事にご奉仕セットを下さい」
「かしこまりました。少々お待ちください」
臨也は厨房に行き、ケーキを持って再び現れお客の目の前に座った。
「こちらのメニューはお嬢様が自分にケーキを食べさせるものになります」
「わ、わかりました」
女性はホークでケーキを切ろうとした臨也の手が女性を止めた。
「どうしたんですか？」
臨也は顔を女性の耳元に近づき小声で言った。
「自分はケーキではなくあなたを食べてみたいです」
女性はショートして保健室に運ばれていった。
「今日は保健室が大盛況になりそうだな」
「これは酷いわね。確信犯さん」
現れたのはたっちゃんだった。
「久しぶりだね。どうしたんだい、お嬢様」
「からかいに来たのにそんなノリノリだった弄れない」
「イベントごとは楽しまないと楽しくないからね」
「それなら、おねーさんと周らない？」
「仕事があるからパス。一夏くんなら良いと思うよ、そろそろ休憩だと思うから」
一夏くんが言った通りに休憩に入り今回の作戦の目的が確定した。
「それじゃ、俺も休憩に入ろうかな」
俺が向かったのは生徒会の出し物だ。
「ここに居たら上手い事時間が潰せるんじゃないかな」
座ってみてみると女子の目が獲物を狩る狼のようだった。
「一夏くんが消えたし作業にかかろうかな」
俺はオータムが戦闘しているところに行った。
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「来ぃ……ガハッ」
白式を呼ぼうとしたら後ろから刃物に刺された。
「う、嘘だろ」
傷口を押さえながら振り向くと
「い、イザヤ」
「やぁ、殺しに来たよ一夏くん」
デュラハンを纏ったイザヤが居た。
「殺し損ねたか」
「な、なんだと」
俺は意味が分からない、何で友人であるイザヤに刺されるのかが分からない。
「俺は一夏くんを一度も親友だと思ったことはないよ」
う、嘘だろ。
その上では楯無とオータムの戦闘が行われていた。
「さて、意識も無くなると思うから嫌みは無いと思うから。バイバイ」
俺は動けないままイザヤに心臓を刺された。
side out

「オータム、一夏くんはログアウトしたから退くよ」
「私の獲物を勝手に殺すな！」
オータムはキレながらも臨也の側により担ぎ離脱しようとした。
「それがあなたがやりたい事だったの」
たっちゃんは無駄な事を聞いてきた。
「違うな、俺は戦争の火種が欲しかっただけだよ。それがそこで死んでいる一夏くんだったって言う話なんだよ」
臨也は平然と答える。
「あなたは友達を殺して何も思わないの！」
人が殺されて冷静に入れる人は少ないようだ。
「彼はただ俺に殺されるために生きてきたんだよ」

「違う！　人は誰もが意味を持って生きてるのそんなのは生徒会長として許さないわ」
「そうですか。行くぞオータム、簪ちゃん（・・・・）」
建物の陰から打鉄弐式を纏った簪が臨也の側によった。
「う、嘘でしょ」
楯無は呆然としてしまった。仲直りしたと思っていた妹が敵側にいた事が。
「嘘じゃない。彼女は自分の意思でこちら側に来たんだよ」
「そ、そんな」
楯無は戦闘を続ける気力を失った。
「さて、戦争を始めようか。ＩＳ学園と忘却機業の戦争をね」
臨也はその言葉を言い残しその場を去りラウラと合流してある場所に向かった。

帰還（前書き）

一夏くん死んじゃた

帰還

俺がオータムに指示した場所は俺の部屋だった。
「ふぅ、疲れた」
長時間高速で飛んでいてGがかかりすげて体が痛い。
「お水をどうぞ」
ラウラはコップに水を入れ持ってきてくれた。
「ありがとう。それより早くここの資料を回収と破棄をしないと」
臨也は必要な物をトランクの中に居れ、残ったものにガソリンをまいた。
「こっちに来てご覧」
臨也はリビングで休憩していた三人を連れ台所に向かった。
「ここに何があるんだよ」
オータムはイライラしながら臨也に聞いた。
「ここから会社に向かうんじゃないか」
臨也は冷蔵庫をどけるとそこにはスイッチがあった。
「これは何？」
簪はその小さなスイッチが何なのかを聞いた。
「これは非常帰還装置だよ」
「それは役に立つんですか？」
ラウラは不安げに聞いてきた。
「使用は一回限りだけど、安全性は安心してくれよ」
「はぁ」
「それじゃ、行こうか」
ボタンを押すと周りの景色が黒くなった。
「お～い、明かりをつけてくれないかい」
「りょ～かい」
ゆる～い声を聴いた後に明かりがつき明かりを本人が出てきた。
「遅かったね。イザイザ」

のほほんさんが立っていた。
「なんで本音が居るの」
簪は驚いていた、いる訳がない人間が居るのだから。
「のほほさんここはどうだい？」
「と〜って楽しいよ」
「イザヤ、なんで本音がここに居るの」
簪は戸惑いながらも臨也に聞いた。
「彼女は俺の理解者でもあり俺のことを知っている人なんだよ」
「イザイザ、ニュースで凄い事してたよ〜」
テレビを見てみると。
『ＩＳ学園の織斑一夏君が何者かによって殺害されました。それに何人かの逃走者が居るとの事』
公に発表されてしまったか。
「さて、いそいで戦争の準備をしないといけないね。マドカ」
奥からマドカが現れた。
「私はとっくにできている」
「それじゃ、他の皆はエネルギーを回復に行ってきて。俺は機体の最終調整があるから」
俺は懐から白式のコアを取り出した。
「何をするんだ」
マドカはコアを見ながら言った。
「黒騎士を復活させるんじゃないか。そのためにターンＸがあるんじゃないか」
「意味が分からん」
「ターンＸは白式のコアを入れて初めてその姿を現すんだよ」
臨也はターンＸを出し、ターンＸにコアを投げるとコアが光りだした。
「コレがターンＸの真の姿、ユニコーンガンダム」
ＩＳと言ったユニコーンガンダムだろ。
「このＩＳ－Ｄって何なんだ」

「それはインフィニット・デストロイヤーシステム、これは強い敵に反応して自動で発動するんだよ」
「楽しそうだなお前」
「だって、ちーちゃんと戦えるんだぜ。でも、これでは勝てないからこうする」
続いて臨也はデュラハンのコアを取り出し投げつける。
「何なんだこれ」
「これは戦場での秘密」
そこには真っ黒なＩＳが立っていた。

さて、行こうか（前書き）

ＩＳ学園崩壊編スタート

さて、行こうか

「エネルギーの補給は済んだかな」
臨也は車の助手席に座りながら言った。
「全員、補給が終わりましたが今から行くんですか」
ラウラは補給が終わったことを言ったが帰って今すぐ行くことに疑問があった。
「今なら教師部隊は俺たちの探索でいないはずだから、今いるとしたら候補生とちーちゃんぐらいじゃないかな」
臨也は夕暮れの景色を笑いながら見ていた。
「この数で大丈夫なのかよ」
イライラしているオータムは人手不足だと言っていた。
「それなら安心してよ。戦闘中に人工知能のＩＳ部隊が来てくれるはずだから」
「はずだと？」
「そんなに切れないでくれよ。今回の戦闘はただの牽制だけだから、あちらに暮桜を出させるための」
「お前は元最強と戦いたいだけじゃないのか」
「ばれちゃた？」
臨也はバカみたいなリアクションをとりオータムをイラつかせた。
「殺されたいか、お前」
「上司に殺すはないでしょ」
「お前らは黙る事が出来ないのか」
運転しているマドカから文句が飛んできた。
「マドカちゃんが冷静すぎるんでよ」
「そうだ、エムは楽しむことを知らな過ぎるんだよ」
臨也とオータムはこの時だけはマドカを攻めることに協力的だった。
「後ろの二人を見習ってほしい」

その言葉は一番後ろに居るラウラと簪だった。のほほんさんは寝ていた。
「何で、私が根暗二人のまねをしないといけないんだ」
その言葉で二人はオータムを睨んだ。
「私のどこが根暗だと」
「その、眼帯が中二臭いんだよ」
「オータム、彼女の左目の事は言ったらダメだよ」
臨也はすかさずフォローを入れた。
「こんなので行けるのか」
マドカ、運転をしながら呟いた。
「大丈夫だよ個々の能力は高いから」
臨也は呟きも聞き逃すことはなかった。
「ほぉ、お前が褒めるとは明日は来ないかもな」
オータムは意外そうな顔をしていた。
「それは心外だな。俺だって褒める時は褒めるよ」
「でも、今日は油断しない方が良いよ。相手だって警戒しているはずだし、それに代表候補生の実力は学年が上のほど高いからね」
臨也はダリル・ケイシーとフォルテ・サファイアの資料を見ながら言った。
「この二人は誰だ」
オータムは資料を覗き込み聞いた。
「ダリル・ケイシーは三年、専用ISは『ヘル・ハウンドver2.5』詳細は不明。フォルテ・サファイアは二年、専用ISは『コールド・ブラッド』詳細は不明。この二人はコンビネーションでの攻撃をしてくるから注意して欲しい」
「お前でも知らない事もあるんだな」
「そりゃ国家秘密だからブロックも堅いよ」
運転席のマドカが何かを合図した。
「そろそろ着くから準備をしろ」
「さて、行こうか。戦争を始めようかIS学園」

遊びに来たよ（前書き）

オリジナルはシナリオを考えないといけないから意外に大変ですね。
投票待っています。

遊びに来たよ

「じゃここに車を置いていくよ」
車から降り、周りの明かりを見た。
「ここに置いといていいのか」
運転していたマドカは疲れた表情を見せながら言った。
「大丈夫この車はハイパージャマーが搭載しているか心配はないよ」
「それにしても明かりが多いと思いませんか」
ラウラは周りを見たが言った。
「そうだね。明かり一つ一つに監視カメラが搭載されているからね」
臨也はある機械のボタンを押しながら言った。
「それでは見つかるのでは？」
「それがコレを使うと周辺のカメラは使えなくなるんだよ」
臨也は小さなスイッチを見せた。
「何だこれ」
オータムはスイッチを見ながら言った。
「これは粒子によってカメラの調子を狂わせる機械なんだよこれはこの車の半径５０ｋｍの範囲に有効なんだよ」
「便利なアイテムだな」
「コレを作っているのは俺らのリーダ様なんだぜ」
「それは納得いくな」
オータムはニヤリと笑った。
「えっと、ここがこうだからこうすると」
臨也はパソコンを弄りながら呟いていた。
「何をしたんだ」
マドカは臨也がパソコンを閉じた時に聞いた。
「門のセキュリティーを切ったんだよ」
「それにしてはおかしくなかったか？」
「気のせい気のせい」

臨也は笑いながら門まで歩いて行った。
「さて、奇襲でも行いますか」
臨也が門に触れようとしたが止めた。
「ISを展開して」
その瞬間、銃弾の雨が臨也達を襲った。
「酷いな、シャルルちゃんこれはなにかな」
門の内側に居たのはラファールを纏ったシャルルが居た。
「一夏を殺しておいて何しに来たの」
「酷いな彼は死ね為に生きていたんだよ」
「そんなことはない」
「なら、君も死んでみるかい」
臨也はISを解き、シャルルに近づいた。
シャルは臨也の恐怖さに一歩も動くことは出来なかった。
「君が目覚めたころにはこの学園は無くなっているよ」
臨也はシャルに銃で撃った。
「さて、先に進もうか」
臨也は振り返り笑顔で言った。
「その前になんで、絶対防御が働かなかったんだ」
オータムは銃を見ながら言った。
「これは無効化システムがついてあるんだよ」
「お前に敵は居るのかよ」
「ちーちゃんがいるよ」
「それより、こいつは殺さなくていいのかよ」
「無駄な殺生は避けたいんだよ」
「嘘だな、殺すに値しないからだろ」
「ばれちゃった。雑魚なんか殺しても面白くないからね」
「お前は最高だな」
臨也は笑いながら前に進んでいった。
「遊びに来たよ。IS学園」
静かな夜に臨也の声は静かに響いた。

楽しいね（前書き）

オリジナルの話はどうですか？　自分は今、文化祭の小説のおかげで今日は寝れないと思います。

それにしても本当に思った通りに教師のほとんどは捜索に出ているみたいで進みやすいがこれは何かありそうだ。
「何かおかしくないか臨也」
マドカちゃんも同じようだった。
「俺もそう思うよ皆はどう思う」
後ろの三人も顔を立てに振った。
「地図的にはここらへんに暮桜が保管されているはずなんだけどな」
俺は携帯に映ってある地図を見ながら進んでみるがそれらしいものは全くない。
「地上から見るからかなら、隠し場所は地下にあるんだね」
俺は耳を地面にあてて地下の音を聞いてみた。
「わずかに空洞があるな。ここら辺を爆破しようかな」
「準備が居るのではないのでしょうか？」
「その必要はないよ。ここら辺一帯に小型爆弾を敷き詰めているからね」
俺はＩＳを纏い。爆弾のスイッチを押すと一帯の建物が崩壊した。
「やりすぎじゃないのか」
「マドカちゃん、人は時に手段を選んでいる場合じゃないんだよ」
「建物が全て崩壊してるじゃないか」
「コレも一つの作戦だったんだから手間が省けて良かったよ。それに今ので地下につながる道が見つかったよ」
地面には大きな穴の下に鉄でできた道があった。
「さて、行こうか」
臨也は穴の中に降り、道を進んでいった。
「そろそろ、見つかるな」
臨也の左手にあるガンドレッドが黒く光っている。
「なんでそれは光っているんだ」

オータムはニヤニヤ笑いながら聞いてきた。
「白式のコアは暮桜に共鳴しているんだよ」
「コアにも意識があるの？」
「それは違うよ簪ちゃん、この二つは巡り合う運命にあるんだよ」
そのまま進んでいくととても大きい扉があった。
「開けたら敵が居ましたパターンがあると思うから、好きに暴れていいよ」
臨也は上機嫌で言った。
「テイション高いな」
「もしかしたらここに暮桜を纏ったちーちゃんが居るかもしれないんだよ」
早くちーちゃんと戦いたいな、俺はこの時をどんなに待っていたのか
「これが終わったら学園を爆破してネットにうpしないと」
臨也はこれまでになく浮かれていた。
「さぁ、ショータイムだ」
臨也は扉を爆弾で爆破し中に入ると数名の代表候補生、生徒会長、ブリュンヒルデが居た。
「こんばんわ～♪　遊びに来ましたよ」
「犯罪者が何しに来た！」
ちーちゃんが叫んだ。
「犯罪なんかしてないよ」
「嘘を言うな！　なぜ、一夏を殺した！」
「彼は俺のＩＳを完成させるための鍵に過ぎなかった」
「鍵だと」
ちーちゃんは暮桜を纏っていないがその威圧感はさらに増していた。
「彼はこれを完成させるための犠牲だったんだ。喜んでよ、ここに世界最強のＩＳが誕生したんだよ。一人の犠牲を出して、これは喜ぶべきだよ」

「喜ぶだと……ふざけるな！　そのために一人の犠牲を出すなんてそれは最強ではない！　ただの人殺しだ」
臨也は冷めた表情になり聞いた。
「言いたいのはそれでけかい？」
はぁ、なんて人は身勝手なんだ。何でコレを素直によろこばないのかな。
「楽しくないから後は勝手に暴れててよ」
その合図で四人は攻撃を開始した。
「さてと、俺は冷めた気分をこの戦いを見ながら楽しもうかな」
その中、一人だけ臨也に近づく影があった。
「お前の相手は私だ」
それは暮桜を纏った千冬だった。
「やっぱり！　そうじゃないと、これで楽しくなりそうだ」
「お前は歪んでいる」
「さて、お披露目だよ。黒姫」
臨也は優しくガンドレッドに触れるとそれは黒く光り臨也を包んだ。
「それが新型のＩＳか」
「どうだい、綺麗だろ」
黒姫は白式に似ているが白式とは違うＩＳだった。
「お前の相手は私だ」

楽しみは取っておこうか

「どうだい、この黒姫の力はちーちゃん」
俺は雪片黒式でちーちゃんの雪片の剣技を防いでいる。
「その武器も装甲も白式と変わらないだろうが」
「それは少し違うんだよこの黒姫はもう第二形態移行してるんだよ」
「それでその力か、笑止」
「と、言いたかったんだけどこれはまだ2割も力を出していないんだよ。だから、あの時の様な力がちーちゃんにはないから面白くないいんだよ」
一撃で倒す事が出来るのを遊んであげてるんだよ。
「それはただの口からのでまかせじゃないのか？」
千冬はニヤリと笑、雪片を下段で構えた。
「その動きも分かってるから」
臨也は下からくる剣技を片手で制した。
「何だと」
「いつまでも君が強いなんてルールは無いんだよ。早くあのころに戻ってくれよ」
「貴様はそこまで戦いに生を入れるんだ」
「それは俺がこの世界を手にしたいからね」
「どこの子供の夢だ」
「嘘だよ。俺はただ、強かったちーちゃんと戦ってみたかったたんだけど、興が覚めたから今日はここで引き下がらせてもらうよ」
臨也は左手に雪羅をコールして、地面に荷電粒子砲を撃ちこみ砂埃をたたせてそのうちに逃げた。
「さて、ここからどこまで強くなるか気になるよ。そして、この子は連れて行くよ」
臨也は影しか見えない状況で誰かを担ぎ離脱して行った。
「居るものは返事をしろ」

その言葉に返事をしたものがそこには自分が良く知る声は無かった。
「篠ノ之を連れていかれたか」
千冬は唇をかんだ。

「一応これで戦争するための準備が整う」
臨也は車の後部座席に座り箒に膝枕をしていた。
「本当にそいつで戦争が起きるのかよ」
「オータム彼女はリーダーの妹だよ。せれを知らない連中は助けようとするはずだよ」
「そこまで考えていたのかよ。それにこいつが私たちのリーダーの妹とは驚きのネタだな」
「俺は知っていたからこそ、この作戦を立てたんだよ」
「お前はそんなのをどこから仕入れんだよ」
「それを言ったら俺の仕事がなくなるじゃないか」
「それもそうだな」
「これで世の中は面白い方向に進むだろう」
臨也は車の中で気味悪く笑った。その笑みはまるでこれから起きることを全て知っているかのように。

楽しんでくれたかい

「それにしても車が海の中を走るなんてね」
そうなんだよ、ＩＳ学園は海に囲まれているからね。
「あの人が改造した特別性だからね」
「それで通すのはいいが今回は無理な気がするんだが」
「そんなに話し声を聞かせると箒ちゃんが起きちゃうじゃないか」
「言葉のキャッチボールの無視か」
俺には何も聞こえない。箒ちゃんの眉が動いてきちゃったな。
「お目覚めかい？　お姫様」
ニッコリと微笑んで声をかけてみた。
「なぜ、私はここに居るんだ。そ、それにこんな／／／」
顔を真っ赤にしながら起きてくれたよ。それにしてもここに居ることを最初に聞かないのは驚いた。
「寝顔、可愛かったよ」
「み、見たのか」
しっかりと見せてもらいましたよ。
「見たよ」
「／／／／」
顔を真っ赤にして再起不能かと思ったらすぐに戻った。
「その前になぜ、一夏を殺した」
また、その事を聞いてくるんだね。
「しょうがない。本当の事を話してあげるよ」
「実は、一夏くんは誘拐された時に死んでいたんだよ。それを俺は心優しくドイツの軍人さんに一夏くんのクローンを渡し手をいたんだよ、それの寿命が無くなったから処理をしたんだよ。君が知っていた一夏くんは会った時から真っ赤の偽物だったんだよ」
「それを知っているのは他には誰が居るんだ」
箒は真剣な顔で聞いてきた。

「俺しか知らないし、ドイツの人たちはこの前、処理させて貰ったからね」
「それは信じていいのか？」
「信じるも信じないのも箒ちゃんしだいだし、俺は嘘は全く言っていない」
「臨也は何がしたいんだ」
「俺は本当の現実を受け止めて欲しいな」
「それには私の力は必要なのか？」
「それは信じてくれたで良いのかな？」
「臨也の態度で決める」
「いいよ」
短時間で色んな事を話したな。でもこの後が大変だな。

「さて、補給しに行こうかな」
車が止まり、臨也はさっさと車から降りた。
「この後はどうするんだ？」
マドカはついて疲れているだろうがこの後の行動を聞いた。
「そうだな、２４時間休憩していいよ。それから、作戦室に来てよ」
「そんなに休憩していいのか」
マドカは臨也の発言に驚いていた。
「俺の黒姫のエネルギーの回復は以上に遅いからね」
「そんなにエネルギー使うのか」
「欠陥機だからね元々ね」
「分かった」
そう言ってマドカは扉を開けて出ていった。
「ほら、皆もここから出なければ好きにしてもいいよ」
臨也はスキップをしながら部屋を出ていった。
「どこに置いたかな？　えっと、あった、あった、ここがこうなってこうなるから計画の２割がダメになったからここはこれで補ってここに計画が崩れるからここは無視してここを使うことになるのかな」
臨也は紙を見ながら呟いていた。
「なにをしているんだ」
箒が後ろから臨也に話しかけるが臨也は集中しているため聞こえていない。
「何をしている……お前はこんなことをしようとしているのか」
後ろから紙を見た箒は臨也を立たせ胸倉をつかんだ。
「居たんだ、気づかなかったよ」
「お前はそんな事をするために学園を襲ったのか」
「これは一応だよ。これが現実になる事は今のところはないよ」

「今のところだと」
それにしても箏ちゃんがキレると意外に覇気があって怖いな。怖くないけど。
「そうだよ。これ以上、俺の邪魔が入らない限りはこうはならない」
「絶対だろうな」
「約束するよ。本当だよ」
「なら、私がお前の計画に害をもたらす者を斬る」
「そんなに積極的になってもらったからには俺も真剣（マジ）で取りかかろうかな」
臨也は真面目な目になり今の作戦を大幅に変えた。
「そんなに変えていいのか」
「そこは箏ちゃんが頑張ってくれんだろ？」
「そうだな、任せておけ」
「任せたよ」
さて、この計画でどこまでいけるかが楽しみだな。

開戦までの間

「計画は11月に入ってから進めたいと思う」
会議室で臨也は計画表を全員に渡しながら話した。
「これがお前が最終的に出来た計画か」
マドカは紙を見ながら話した。
「これではこれでは最終手段は書いてないんだけどね」
「最終手段とはなんだ」
「それは秘密なんだよね。仲間にも言えないんだよ」
これは箒ちゃんしか知らないがこれは本当に言えないんだよ。
「ここに書いてる事は本当にするのか」
マドカは計画表の一番目の事を言った。
「これはまずいのでは」
ラウラもその事で意見があるみたいだ。
「それは私も同意」
箒もだった。
「それは全世界への宣戦布告だからやらなきゃいけないよ」
「これはやりすぎかと」
「これは布告なんだからこれぐらいの事はやらなきゃね。箒ちゃん」
「そうだな。これぐらいで良いと思うぞ」
「ほら、一人でも賛成してくれたんだからいいでしょ。オータムは意見はないのかい?」
「こんな楽しい計画に否定なんかないな」
「これで意見は半々だけどどうする？」
これが通らなければこの先の事は全部だめになる。
「言っておくがこれが成功しないと作戦は成功しないと思え」
これは助かるよ箒ちゃん。
「それはなぜ言い切れる」
マドカが否定してきた。

「私は臨也がやる事を全て聞いたからな」
その瞬間、全員が驚いた。
「なぜ、こいつは全てを知っているんだ」
「後ろから覗かれたんだよ。集中していたら」
あの時は驚いたよいきなり胸倉を掴まれたから。
「それより皆はこれに参加するのかい？」
「その話よりなぜ、そいつが特別扱いを受けているんだ」
マドカは引かなかった。
「それよりいま「「早く言え！」」
「箒ちゃんは今回の作戦のかなめだから必要なところは早く覚えておいてもらった方が良いと思ったからだよ。これで良いかな？」
「ああ、理解した」
なんで、マドカちゃんとラウラちゃんと簪ちゃんは箒ちゃんを睨んでるのかな？　俺には理解が出来ないんだけど。
「それにしてもお前がこんな大胆な作戦を行うなんて意外だな」
「オータム、俺はね面白い物の為なら大胆な行為を行うんだよ。それじゃ、意見もまとまったから解散で、以上」
早くこの場から立ち去ろう。

自分の部屋に帰ってきたが何をしようか。

「パソコンを一応点けとかないとね」

開戦までは後、一週間も間があるから暇で暇でしょうがないから
ＩＳの会社に何回もハッキングを仕掛けて色んな情報を手に入れてしまった為、今回の戦闘で使われそうなパッケージの弱点を追及するしかないじゃないか。

「それにしても、この世界はどんどん俺の嫌いな世界に変わっていくよ。勘弁してほしいよ」

早くこの世をリセットしたいな。

「それにこの計画にはあまり巻き込みたくないからね」

臨也は今回の計画とは別の紙を見ながら呟いた。

「今回の戦闘はどれくらいの戦力を投下してくるかな？　それによって俺の計画は大いに助かるんだけどな」

紙をめくりながら確認をしていた。

「この戦争が終わればこの物語も終わる。そして、再生の時間が来る。そうだったよね、束ちゃん」

臨也の後ろから篠ノ之束が姿を現した。

「そうだよ。イザ君」

「本当にこれで俺の願いは叶うんだよね」

「当たり前だよ。それがイザ君の願いなら束さんは物凄く頑張るんだから♪」

「そうだね。これが俺と君との償いになるからね」

「そうだね。それがちーちゃんにできる償いだからね」

「ＩＳが無い世界なら今頃どうなっていたんだろうね」

「それは束さんでも分からないや」

「分かる事は今より日本は平和だと思うよ」

「そうだね。ちーちゃんも箒ちゃんも楽しい顔をしてそうだね」

「その為にはこの作戦は例え仲間を裏切る形になっても成功させないといけないからね」
「イザ君はそこまでしてこの作戦にこだわるの？」
本当だよね。いつもの俺ならこんなことはやらないだろう、でも……
「こんな世界にした僅かな償いと思ってくれた方が良いかな」
「そんな事、イザ君じゃなく私の役目だよ！」
束が声を上げげた。
「これは俺が悪かったんだよ。君の所為じゃない」
「で、でも」
「そんなに自分を責めるのなら。束ちゃんもこの作戦に本気で乗ってくれないかな」
「その理由は？」
「それで君の罪を償ってもらうじゃダメかな？」
「分かった。でも、行くときは束さんも一緒に行くからね」
「それは否定できないのかい」
束は顔を横に振った。
「その気持ちは本気で受け取っていいのかな」
束は力強く頷いた。
「分かった、君もあそこに連れて行くよ。それで俺と君の償いだ」
この作戦はどんな犠牲を払ったって成功させてみせる。

お話をしようか

「さて、皆集まったね」
会議室には黒服を纏っている全員の姿があった。
「それじゃ、まずは出だしにデュノア社を壊しに行こうかな」
その言葉にラウラが手を挙げた。
「どうぞ」
「なぜ、デュノア社なんですか？」
「あっても無くても変わらないから」
あそこなら、少しのＩＳの情報で人間を提供してくれそうだし。
「狙うのに意味があるんですか？」
「この人数では足りないしね」
「襲っては人は死ぬんでは？」
「話し合いだよ。お話し。今日はＩＳの会社同士のお話し合いなんだよ」
お話で意味がなえれば消せばいいしね。
「時間がもったいないから早く行こう」
臨也は会社の地下にある滑走路に向かった。
「毎回ここには驚かされるな」
オータムは周りを見ながら驚いていた。
「地下から人工島に着いただけで驚かないでくれよ」
「この人工島はどうやって作ったんだよ」
「俺の金で作ったに決まってるじゃないか」
その言葉に全員は驚いた。
「「「（いったいどれだけお金を持ってるんだ）」」」
臨也は笑いながら呟いた。
「そこら辺に居るバカみたいな金持ちよりはあるよ。仕事が仕事だし」
「お前ら何をそこで突っ立っている。早く乗れ」

ただ一人平然と飛行機に乗り込んでいたのはマドカだった。
「なんで、お前は驚かないんだ」
「私はアイツの私物は一通り見せて貰ったからな。驚く必要が無い」
「詰まらないな俺は驚くの見たくてここに連れてきたのに」
「「「（まだ、他にあるのか！）」」」
「ふん、あいにくだが私はお前の悪ふざけに付き合うつもりない」
「面白くないから早く行こうか」
こんなことに時間を潰すのも勿体ないかな？
「ほら、行くよ」
臨也は小型飛行機に乗り込み一言も喋らずに寝た。

「デュノア社長自らお出迎いありがとうございます」
「いえ、こちらも折原さん自らこちらに来られるとはありがとうございます」
二人は握手をして、小さな部屋に移動した。
「それで、お話の答えはどうですか？」
臨也は仕事口調のまま話しかけた。
「こちらとしては嬉しいのですが、なぜうちの会社なんですか」
男は真剣な顔で答えた。
「いや、戦争をするのには人数が多い方が勝てると思っていますか？」
「私はそう思いますが」
「それは違います。勝つためには勝意思が無くては勝てません」
「意思だけで勝てるんですか」
「どれだけ年季が違う事があっても今までの努力でどうにかなる物ですよ」
「勝つための意思ですか。それなら私の答えはこうです」
部屋の壁が壊れＩＳの部隊が乗り込んできた。
「国家犯罪者折原臨也！　お前を拘束しに来た。抵抗しなければこちらは手を出さない」

リーダと思われるものが偉そうに喋った。
「貴様みたいな人間でも殺しては目覚めに悪いからな」
「それはこちらのセリフですよ。Ｍｓ．マリアンヌ」
「こちらの情報も漏れているのか」
「当たり前ですよ。候補生止まりの雌ブタさん」
臨也はニッコリと笑いながら告げた。
その瞬間、周りの空気は一瞬マイナスの世界になった。
「殺してその死体をＩＳ学園に送りつけます！」
「やってみなよ。雌ブタさん」
臨也が指を鳴らした瞬間、天井が壊れそこから箒たちが降りてきた。
「協定は成立しなかったか」
「せこい人間は強い人間に執着するからね。やっちゃっていいよ」
その戦力差は相手側の方が上だった。しかし、結果はとしては臨也側の圧勝に終わった。
「代表候補生止まりがこの子たちに勝てるわけがないじゃないか」
「なぜだ」
女は額から血を垂らしながら呟いた。
「君が弱いからだろ」
「私は弱くは」
「だったらなんで、高校生に負けてるのかな？　それは君が弱いからだろ。違うかい？」
「……」
女は黙ったまま何も喋らない。
「もし、強くなりたいんならこちらに来る気はないかな？　こちらに来たら君が求めていた力が手に入ると思うんだけど」
「！」
女は一瞬だけ行きたいと思ったが自分には国がある。代表候補だが国への忠義がある。
「どうしたんだい？　返事は簡単だろＹｅｓって言えばいいんだよ」

女は口を開いた。
「わ、私に力を下さい」
「成立。それじゃ、さようなら。デュノア社長」
臨也は持っていた銃で壁にもたれ掛っている男を撃った。
「社長も死んだし、社員の皆さんはどうしたいですか？　付いてくるか、死ぬかのどちらを選びますか」
社員の全員は臨也の方に付いた。
「これが話し合いの結果だよ」
臨也は死体の男にそう告げ去っていった。

人に騙されるのは本当に気分が悪いよ、このイライラをどこで晴らそうかな？

「ここから近い研究所ってないのかい？　マリアンヌ」

俺は治療されている女に話しかけた。

「ここから西に三キロの所に一つあるはずだが」

「今からそこに行こうか」

「今からですか？」

ラウラが側によってきた。

「何か不満があるのかい？」

「今は撤退した方が良いと、自分は思うのですが」

意味は分かるがこのまま戻るにしても追跡部隊が来てしまうからな。いや、一つだけ方法はある。

「マリアンヌ、すまないが部隊に連絡して情報は偽物で社長は何者かによって暗殺と伝えてくれないかな」

「それは良いけど、それでは怪しいのでは？」

「そして、通信を切る直前に爆発音を鳴らせばいいんだよ」

「敵の攻撃と見せかける」

「その通りだよ。やっぱり大人は子供より頭の回転が速くて助かるよ」

「それでも、死体が無ければおかしいのでは？」

「だから、大きな爆発音なんだよ」

「建物を爆破する」

「その通り、通信は先に録音しておくんだよ」

「予想して喋ることは私にできるんですか」

「俺に良い秘策があるから任せておいてよ」

その臨也の顔は笑っていた。

「それじゃ、再生開始」

その言葉と共に録音機が再生された。
『こちら、ワルキューレ応答してください』
『こちら本部、どうしましたかワルキューレ部隊』
部隊の名に笑えてくるよ。
『情報は囮の様でした』
『それでは引き続き捜索を』
「今だよ」
臨也は小さく呟いた瞬間に会社が崩壊した。
「これで全部の部隊はこっちに来るはずだから、さっさと退却しようか」
素早く小型飛行機に乗り込み素早く退却した。
「これでは破壊工作は出来ないのでは？」
隣に座っているラウラがたずねてきた。
「見てたら分かるよ」
臨也が握っていたボタンを押すと飛行機が突然軽くなった。
「何が起きたんですか！」
ラウラは驚きながら窓の外を見た。
「どうだい、綺麗だろ」
地上にあった研究所が爆破した。
「何を積んでいたんですか」
「小型爆弾をたくさん、しかも威力は馬鹿でかいんだよ」
「見たらわかりますがそれをどこから仕入れたんですか」
「裏ルートからごっそりと入荷しました。安かったな」
十個で５０万って安かったよ。
「こんなことして大丈夫でしょうか」
「大丈夫、証拠は全部壊してきたから」
楽しいな、こんなことが毎日起きたらもっと楽しいのに残念だ。
「計画を次に段階に進めようか」
紙を見ながら今後の計画の最短化が出来ないかを考えた。

始めようか

「さて、いよいよこの時が来たよ」
臨也は会議室で言った。
「やっとこの時が来たのか」
箒が呟いた。
「戦力も整ったし全面的に戦争を始めようか」
臨也の後ろにスクリーンが降りてきて映像を映した。
「これが俺が戦争に選んだ地形だよ」
その地形は崖などがあり奇襲ができやすい場所だった。
「どうやっておびき寄せるんですか」
ラウラは立ち上がり聞いた。
「それは大丈夫、もうＩＳ学園に招待状を送ったから」
周りは驚いた。それはそうだ招待状を送る事態がおかしいのだから。
「送ったのはやっぱりお祭りごとは招待状を送るのが日本のいいところじゃなかったっけ？」
「それは違う！」
箒は叫んだ。
「お前は何を間違えている」
周りはうんうんと頷いていたが
「お祭りと戦争は違うのだぞ！　そもそも戦争の時は会見だろ」
「そうだったね」
周りの全員はこけた。
「その通りだ」
「俺としたことがこんな初歩的なミスをするなんて」
「反省したか」
「そのおかげで、もっといい計画が練れたよ」
「それより、時刻は何時にしたんだ」

「今日のお昼頃だったけな」
「今から行けば罠を仕掛けるのにも時間があるな」
「箒ちゃんは戦闘に参加しないでね」
その言葉で箒は唖然とした。
「何故だ」
「あっちの目的は箒ちゃんだし、戦闘に参加したら面白くないじゃん」
「そ、そうだが」
今回の戦闘は君には全く関係が無いのだから俺は巻き込みたくないんだよ。
「守らせてくれないかな？　君を」
その言葉で箒の顔は真っ赤に染まった。
「それならしょうがない／／／／」
これでいいんだ、これで
「さて、行こうか。戦争をしにね」
箒を残した全員は会議室から出ていった。

「来てくれて嬉しいよ。さぁ、始めようか！　戦争を」
臨也は崖の上から叫んだ。
「箒はどこに居るんだ！」
「俺を倒したら教えてあげるよ、ちーちゃん」
さて、逃げようか。
臨也はＩＳを纏わずに走り出した。
「ＩＳを纏わずに逃げれると思っているのか」
千冬は一人で飛翔し臨也を追いかけた。

その頃、地下では
「私だけ置いて行かれるのは酷だな」
私は戦線から外されて暇になっていた。
「こうなったら、ここの臨也の部屋を捜索してやる」
私は早足で臨也の部屋に急いだ。
「それにしても綺麗すぎないか？」
私は驚いた、男子の部屋は汚いと思っていたら書類は棚に並べられていて終わってない書類は机に上に積まれていた。
「ん！　パソコンが付いたままじゃないか。消しておこう」
私はパソコンの画面を見たらプログラムを開いたままだった。
「こ、これはたまたま見たんだ。わざとじゃない」
箒はマウスで拡大するとそこに書かれていたものに驚いた。
「アイツはまた、私を裏切るのか！　一人で行かせるか」
私は走って部屋を出た。

「惜しいな、そんな何じゃ火傷にしかならないよ」
俺は零落白夜をギリギリで避け続けている。
「お前は本当に人間か」

「人間じゃなきゃ戦争なんか起こさないよ」
「これで、終わりだ！」
臨也の右肩が付き抜かれた。
「こんなんじゃ俺は殺せないよ」
臨也は突かれた傷口を押さえながら走り続けた。
「どこまで行くんだ」
あと少し、まだＩＳは起動してはいけない。
「はぁ、はぁ」
前が霞んできたちゃんとまっすぐ進んでるのか。
「これで、お終いだ」
後ろを振り向いた瞬間、右腕を斬りおとされた。
「ぐっ！」
それでも臨也は止血剤をすぐに飲み、また走り出した。
「やっと着いた」
着いた場所は何もない崖に囲まれた場所だった。
「ここまで来て何をするんだ」
千冬は警戒を解かずに構えていた。
「これからとっても素晴らしい事が起きるんだよ」
地面が光りだした。
「何をしたんだ」
「やっと起動したか、これで俺の願いは完成する」
俺は左腕で右肩をえぐった。
「うぁぁぁぁぁぁ！」
「こ、これで、俺の計画は完成した」
右腕からはたくさんの血が溢れてきた。
「何だこれは！」
臨也の血が地面に落ちた瞬間に円が描かれた。
「さあ！　俺の願いはこれで願う」
その時、空から紅が降りてきた。
「何をしているんだ」

「箒ちゃん、来たらダメじゃないか」
「ふざけるな！　一人で死のうなんかふざけるな」
「残念だけどこれは俺の死と共に起動するんだ。これは誰にも止められない。諦めて人類のリセットをそこで見といてくれよ」
光りだした。これで世界はリセットされる。

どうなってるんだ

光りだした光は徐々に消えていき無くなった。
「どうなってるんだ」
なんでリセットされないんだ。
「箒ちゃん君が何かしたのかな」
臨也は箒が握りしめている物を見た。
「すまない。でも、私は臨也一人だけ死ぬのは嫌なんだ」
「俺は死ぬことはない」
「それは嘘だ！　この地に血を注いだものはこの世界の因果から消えると書いてある」
箒はポケットから紙を取り出し見せた。
「俺の机を見たんだね。それについては許すけど、君は何でここに来たんだ」
「私は臨也が一人でいなくなるのを見たくないからだ」
「俺は一夏くんを殺したんだぜ」
「それの理由は聞いたから無効だ」
「俺は君を騙し続けていたんだぜ」
「知っている。お前はいつもそうだからな」
「君の存在が消えてもいいのかい」
「臨也と一緒なら私は嬉しい」
「そう言ってもらえると嬉しいよ。俺と一緒に来てくれないか」
俺は残っている左手を差し出したがその手は届く前に斬りおとされた。
「ぐぁぁぁぁぁ」
俺の腕を斬ったのはちーちゃんだった。
「お前だけが消えるなんて私は許さんぞ。その命で償ってもらう」
「立っていられるのも一苦労だな」
俺はバランスを崩し倒れかけるが箒ちゃんが支えてくれた。

「意識はあるな」
「キツイかな」
俺は笑いながら言って見せた。
「笑っている場合か」
「これが死ぬって事か怖いな」
「待っていろ！　すぐに私が一緒に行ってやるから」
篝はナイフを握りしめ手から血を流しそれを地面に落とした。
「すまないね」
「別にいいさ。私はそんな臨也に惚れたんだから」
篝は臨也にキスをして、手に持っていたボタンを押した。
「ついて来てくれてありがとう」
「臨也好きだ」
篝はは光の中で臨也を抱きしめながら空を見た。
「綺麗だな」
「これが最後に見る景色かとっても綺麗だな」
世界は真っ白な光に包まれゼロに戻された。

ＩＳのない世界で（前書き）

今までありがとうございました

ＩＳのない世界で

「これが世界の変革かよ」
学生服を纏いながら部屋を出た少年。
「母さん、行ってくるよ」
「お弁当はどうするの？」
リビングからは若い女性の声が聞こえてくる。
「お弁当はいらないよ」
「それならいいわ」
少年は学生服を一番上まで閉めながら家を出た。
「遅いだろ。何やってたんだよ」
少年は小走りで電柱に居る男女2組の近くによった。
「朝は株を見ていたら時間がたったんだよ」
「お前は株が好きだな」
今度は赤髪の少年が話しかけた。
「俺から株と情報を無くすと何も残らないからな」
「偉そうに言うな」
背の高い女性は遅れてきた少年を叩いた。
「それよりも急がないかい。学校に遅れるよ」
少年がそう言うと全員は揃えて言った。
「「「「お前のせいだろ！！」」」」
結局５人は学校には遅刻してしまった。
「そろそろ、高校受験かどこ受けようかな」
「一夏が勉強の事を口にしたぞ」
「悪いかよ、弾」
二人はイスに座りながらふざけていた。
「俺には関係ないけど」
「臨也はどこ受けるんだよ」
「俺はね。来良学園で受けようかな」

「そこって、制服が自由なんだよな」
「俺は藍越学園でも受けようかな」
「お前は就職の事しか考えてないな」
「だってさ、千冬姉が『お前みたいな餓鬼が働こうなんて１００年早い』なんて言いやがるんだぜ」
「ちーちゃんは過保護なんだよ」
「それなら、お前も妹を大事にしてるじゃねえか」
「それは勘違いだな。俺はウザいと思ってるんだけどな」
「妹をウザいとか言うなよ」
「そう言い弾はシスコンなのかい？」
「俺はシスコンじゃない！　それは一夏に言ってくれ」
「なんで、俺なんだよ」
「無理だな」
「否定してやる！」
「「違うのか？」」
　一夏の後ろから女性の声が聞こえてきた。
「一生無理ね」
「酷くないか、箒、鈴」
　二人は顔を横に振った。
「この中で勉強しなくていいのは臨也と箒だけか」
「それは、君たちが悪いんじゃないのかい三下」
　三人は心に何かが刺さった。
「そうだな、部活をしてないからいけないいんだ」
「俺は入ってないけどね」
「それでも生徒会長していたではないか」
「あれは先生からお願いされたんだよ。ほんとうに困るんだよね、人に頼られるのは」
「「「（天才は嫌いだ）」」」
「それにしても、箒ちゃんは一人っ子で良いな」
　臨也は勉強から話を変えた。

「私としたら姉が欲しいところだったがな」
「何で、姉何だい？」
「何だか私には姉がいたような気がするからな」
「気のせいじゃないのかな」
「それならいいのだがな」
俺は憶えているこの世界は一回この手でリセットされている。しかし、俺と言う存在はこの因果から消えず篠ノ之束がこの因果から消えている。すなわちこれは世界がリセットされたのではなく世界線が変わっただけだった。この世界の未来は俺には分からないがこの世界を生きるのも悪くないのかもしれない。
「臨也は結局どこを受けるんだよ」
俺は微笑んで答えた。
「藍越学園に行くことにするよ」

お知らせ

今回この小説のＩＳが無くなった後の世界を書いていこうと思います。
「いきなりじゃないか」
それがさ、リアルの友達にあの終わり方は納得がいかない続きを書いてと言われたのでずっと悩んできました。
「なんでさ。俺の事を書くんだぜ」
それが問題なんだよ。ＩＳが無い世界に変動しただけだろ。
「そうだね。実際、俺が消えて終わる物語だからね」
だろ、普通に日常パートを書こうと思うんだけど。コレのヒロイン最後箒になってたよな。
「それは君がやった事じゃないか」
それはッ否定できんが、あの時は勢いに任せてきたからな。
それにこの小説、千冬さんの人外さがアップしてるんだよな。
「悪乗りかよ～」
「そりゃー静ちゃんを合成した様な物だからね」
絶対、お前いつか死ねぞ。てか、殺すぞ。
「まさかの作者からの殺人予告」
それは嘘だけど
「まぁ、俺らの日常を書きなよ」
そうですね。それなら、適当に箒とくっ付けて終わらせますか。
「それは許さんぞ！」
うぉ、まさかのヒロインが登場しやがった。
「お前、適当は反則だ！　ちゃんと私と臨也の恋人風景を書け」
くそ、剣道少女まで出てきたらこっちの不利だ。このまま強制終了で
「させるか」
ぐっふう

「いや～作者も死んだみたいだから、俺がラブコメ書くのどうかと思うけど書こうか」

「本当か臨也」

「なんで、箒ちゃんはそんなに嬉しぃんだぃ」

「それは私が真のヒロインだからだ。この小説が終わるまでに私とお前の絡みはどれだけあった。無かっただろ。最後の方に少しあっただけだ」

「もしかして、それをずっと根に持ってたのかい」

「当たり前だ！」

「そう言うことで、明日から復活しますよ」

「読んでくれることを願っているぞ」

お…俺は…認め…ない

「チェスト！」

すみません。嘘です。見てください

「作者が土下座までしてるよ」

普通な高校生生活（前書き）

はい、久しぶりに書きますのでキャラの口調がおかしくなってると思うのですみません。

普通な高校生生活

藍越学園入学式
「あれ、一夏くん受かってたんだ」
やあ、皆久しぶり。皆が大好きな臨也くんが帰ってきたよ。
「おい、俺が受かってたの知ってるくせになに言ってやがるんだ」
「俺の情報力を嘗めて貰ったら困るよ」
「合格発表前日に言うのは反則だろ」
一夏くんは残念な顔をしていた。
「せっかく教えてあげたのに酷いな」
俺はヘラヘラ笑いながら言った。
「それにしてもこの五人組が全員受かるとは思はなかったよ」
ここに居るのは、一夏くん（鈍感）に弾くん（シスコン）に鈴ちゃん（貧乳）に箒ちゃんがいる。
「「「何だか失礼な事を言われた気がするんだが」」」
「気のせいじゃないから」
「「「おい、そこは言わないだろふつう」」」
言わないのを言うのが俺なんだよ。
「それにしても入学式は面倒だな。帰りたいよ」
そんな俺に叱る人がいる。
「イザヤ、お前は一年代表なんだからシャキッとしろ」
叱ってきたのは箒ちゃんだよ。
「いや、だって俺が学年主席になるのは決まってたんだからいいじゃん」
えーっと嫌な顔をしながら言った。
「それでは、学年代表の折原君前に出てきてください」
やっと、俺の出番だよ。
「それじゃ、行ってくるよ」
最後はカッコいい顔をして前に行った。

「あぁ、行ってこい」
箒ちゃんの声援を受けながら。
緊張しなくていいですよ」
前に出た瞬間に顔が優しそうなおじいちゃんが居るよ。
「大丈夫ですよ。楽しみにしてくださいよ」
ニヤリと笑いながらマイクを受け取り朝礼代に上がった。
「初めまして、一年代表の折原臨也です。在学生の皆様は僕等、一年の見本になる皆様なのでくれぐれも僕らの前で模範的な態度は慎んでください。見苦しいので、それに俺はあなた達の下に見られるのは嫌なので声をかける時は臨也さんと呼んでくれよ。一年代表、折原臨也」
台から降りて自分の列に戻ったら箒ちゃんに殴られた。
「何をしてるんだ。お前は！」
「おいおい、箒ちゃん。怒鳴らなくても聞こえてるからそれに周りに迷惑だから静かに」
俺は人差し指を箒ちゃんの唇に当てた。
「／／／／」
顔を真っ赤にして可愛いな。
「さて、挨拶も終わったし帰ろうかな」
今日は荷物もないし帰ろうか。
「いや、帰る事は出来なさそうだな」
箒ちゃんは真面目な顔で後ろを見た。後ろには昭和の空気を漂わせる人たちは誰だろう。
「アレなんだろうね」
俺は興味なさそうに聞いた。
「たぶん、あの挨拶を聞いて腹をたてたんだろう」
「短気な人たちだね。しょうがない最後まで話を聞こうかな」
話を聞き終った瞬間に学校の裏まで連れていかれたけど思ったより弱くて残念だったよ。
「ふぅ、これで終わりなのかい」

俺は不良の山のてっぺんに座った状態です。
「しょうがない。これから、君達の下僕ね」
そう言ってクラスに戻りましたよ。
「ただいま」
教室の扉を開けた瞬間にチョークが飛んできた。
「いきなり、何するんだい。ちーちゃん」
俺はチョークを避けたけどね。
「ここでは織斑先生と呼べ」
「嫌です」
ちーちゃんの宝刀主席簿が飛んできた。
「危ないな」
飛んできた主席簿を一夏くんでガードした。
「これが俺の守護神ｏｒｉｍｕｒａだ」
一夏くんの額には主席簿が刺さっている。
「これただの身代わりだろ」
「おっと、まだ死んでなかったのかい」
「殺す気だったのかよ」
「えっ！　それ以外に役に立つことあったっけ？」
「お前、酷いな」
「いつもの事じゃないか」
「自覚あるのかよ」
「当たり前じゃないか。俺はいつも本気だぜ」
その後、ちーちゃんの第二発目は弾でガードさせてもらったぜ。
これがＩＳの無い世界の進み方だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6851w/

転生した俺はISの世界で折原臨也になった！

2012年1月2日11時46分発行